

「白い坏形カワラケ」考

村山 卓

要旨 東関東を中心に分布する灰白色・坏形のカワラケ（大宝Ⅰ類）の分布と時期、出現過程、組成を確認した。その結果、①茨城県西部を中心に分布する坏Ⅰ類・埼玉県北西部を中心に分布する坏Ⅱ類が別々に変遷する、②坏Ⅰ類では15世紀後半～17世紀初頭に及ぶ変遷が認められるが、盛期は15世紀後半～16世紀前半である、③15世紀前半の小山市祇園城跡のカワラケに祖形がある、④形態が異なる大皿・小皿を基本の組成とし、特大の大皿や脚台付の器種がある、等を明らかにした。③に関しては、小山・古河地域に14世紀代から地域的な繋がりがあったものと思われ、古河公方移座の背景として注意される。また、戦国期前半における当該地域のカワラケは、中核的な城館を中心に各々異なるタイプが変遷している。他方、地域を超えた形態・制作手法の共有もあり、ある種の様式圏が存在するものと捉えられる。今後、遺物論を整理しながら、戦国期におけるカワラケの位置付けを考えていきたい。

1 問題の所在～白い坏形カワラケ

本稿では、主に茨城県西部から栃木県南部地域に認められる、「灰白色胎土の坏形カワラケ」を扱う。約20年前、埼玉県岩槻市渋江鑄金遺跡のカワラケと、茨城県下妻市大宝城跡のカワラケが類似していることが気になり、その分布や時期的位置付けの問題に興味を持った。また、岩槻城跡出土資料を古河公方勢力との関係で捉える見解があることを知った（田中2005）。大名権力と遺物の関係を捉えようとした場合、その分布、時期の問題は避けて通れないものであろう。まずは分布と時期的位置付けを検討したい。今回は主に茨城県西部と埼玉県内の事例を扱いたい。続いて、出現の経緯や組成の問題に触れ、本資料群の特色を明確化していきたい。

なお、ここで言う「灰白色胎土の坏形カワラケ」とは、次のような特徴を有するものとする。

- ①径の小さな底部から器壁が直線的に立ち上がり、逆台形の坏形を呈する。
- ②底部には板状圧痕を有するものが多く、内底面（見込み部）は一方向から強く撫でつけて窪ませ

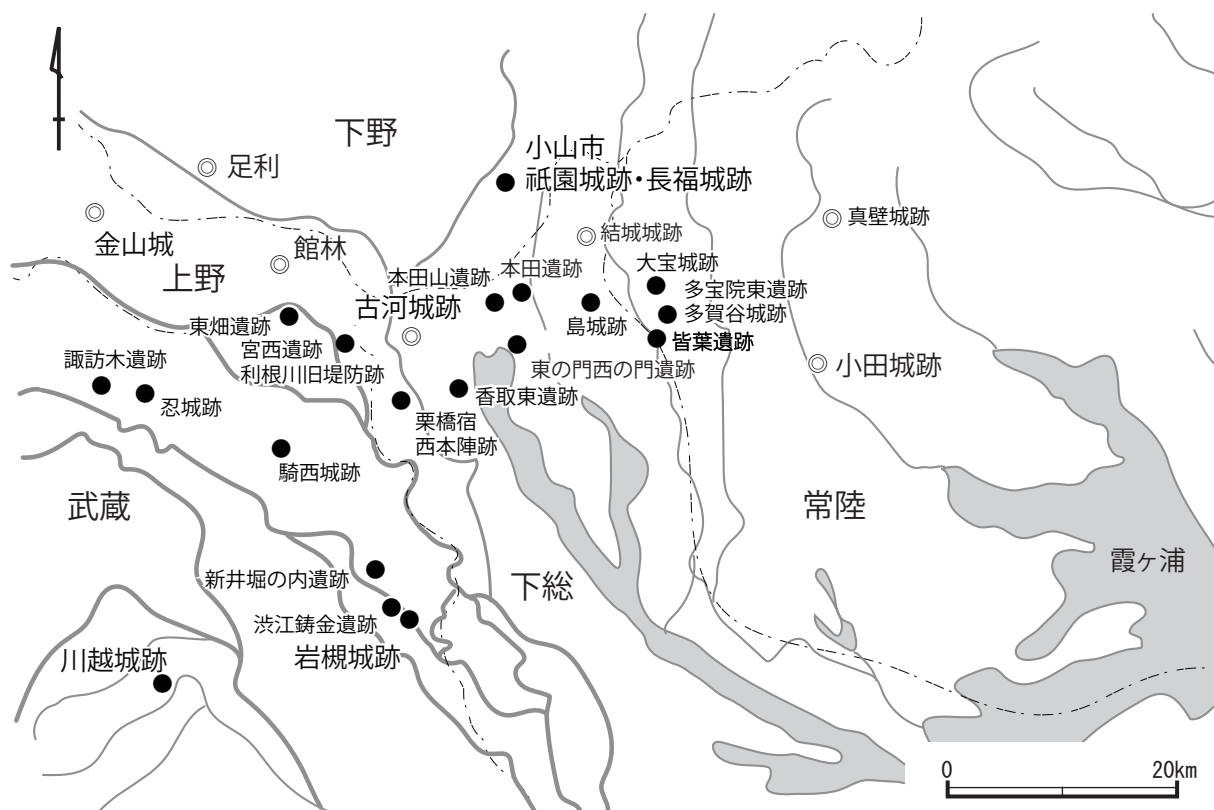
る。

- ③胎土は白色味が強く灰白色や浅黄橙色を呈するものを基本とする。角閃石を多く含むが雲母の包含はほとんど無い。

この種のカワラケについては、かつて『国指定史跡大宝城跡37次調査報告書』（下妻市教委2008）において「大宝Ⅰ類」と称したことがある。ほかに適当な名称もないので、しばらくは、この仮称を用いて論を進めたい（註1）。

2 茨城県西部の様相

茨城県は、広く「坏形」カワラケが分布する地域である。その内容は、個別の地域ごとに検討が行われており、なかでも桜川市真壁城跡の事例については宇留野によって詳細な検討が行われている（宇留野2005）。筑波山南麓地域については、小田城跡を中心とした広瀬（2011）、土浦市域を対象とした比毛の検討（2009）がある。県央部では田口（2011）による俯瞰的な編年があり、近年では水戸市埋蔵文化財センターの展示で、市内遺跡を中心に編年を見据えた新垣の仕事がある



第1図 主要遺跡の位置

(新垣 2020)。いずれの地域でも坏形カワラケが中心であり、県内に広くこの種のカワラケが存在することが分かる。

茨城県西部においても、宇留野・新垣 (2011) による編年案が示されている。一方で、この地域は調査数が少なく、通時的に遺物変化を追うことには困難があった。筆者も下妻市大宝城跡の例から近世前半に至る変遷案を示したことがあるが、やはり資料数の制約があり不十分であった (村山 2008)。茨城県西部は、茨城・埼玉・栃木・群馬にまたがる「大宝Ⅰ類」の中核的な位置を占める場所とおもわれ、15・16 世紀を中心に東関東に広がった「坏形カワラケ」の実態を考える上で重要なエリアだと位置づけられる。

近年は、古河市内の調査報告が進み、豊富な資料をもとに在地土器類の分類も試みられている (宅間 2015)。また、真壁城跡と同タイプのカワラケが出土した下妻市大宝城跡の第 31 次調査資

料も再実測が示された (赤井 2021)。新たな成果も出ているので、まずは茨城県西部の様相を通覧してみたい。

下妻市大宝城跡 (下妻市教委 2008) (第2図上段)

大宝城跡では、これまで大小含めて 40 次以上の調査が行われており、第 31、37、39、41 次調査区等で「大宝Ⅰ類」のカワラケが出土している。本稿では筆者が実見した第 37 次調査のものを扱う。主な 3 点の資料について、各々 A～C 種として特徴を記す。

【大宝城 A 種】(第2図1) 地下式坑である S K 3702 から口径 10.9cm、底径 3.4cm、器高 3.3cm の資料が出土している。口縁部付近の器壁が薄いのに対して、体部下位の器壁は厚くなり、さらに底部を強くナデつけることによって独特の断面形態となる。

【大宝城 B 種】(第2図2) 地下式坑の S K 3701 からは、口径 9.5cm、底径 3.1cm、器高 3.0cm の

資料が出土している。A種と比較して、体部下位はあまり厚くならず、器壁の厚さはほぼ一定に保たれている。内底面は強く撫でつけられる。

【大宝城C種】(第2図3) 井戸跡S E 3701からは、口径9.8cm、底径3.6cm、器高2.8cmの資料が出土している。前二者より底径が大きく、器高はやや低い。また、口縁部端部は若干外反ぎみとなる。「大宝城C種」とする。この井戸跡から多量に出土した土鍋は全て器高の低いものであり16世紀末以降の様相を示す。加えて、中層から出土した土師質土器壺は江戸地域の17世紀前半頃の遺構から出土する「葉茶壺形土器」であり、井戸の埋没時期は17世紀前半に降る可能性が濃厚である(註2)。

以上、大宝城跡第37次調査区からは、器形の異なる3つのカワラケが出土した。このうち、地下式坑出土の2点(大宝城A・B種)は、体部内面上位に、幅の狭いロクロナデが強く残っているのに対し、井戸跡出土のもの(大宝城C種)には、このようなロクロナデの痕跡は残っていない。前者のほうが丁寧な調整である印象が強く、おそらく地下式坑出土の2点のほうが井戸跡出土資料より先行する時期に位置付けられよう。

このほか、下妻市内では、多賀谷城下に含まれるかと思われる多寶院東遺跡の試掘資料(下妻市教委2012)や、旧千代川町皆葉遺跡(千代川町教委2003)などで、坏形のカワラケが出土している。また、多賀谷城から採取された輪宝墨書の資料が資料紹介されている(赤井2021)。

八千代町和歌(島)城跡(八千代町教委1985)(第2図中段)

範囲確認調査が行われており、Aトレンチで検出された堀跡から複数のカワラケが出土している。出土したカワラケの中には「大宝城I類」とまったく異なるタイプのもの(第2図24)も含まれており、やや時期幅があるものとみられる。

口縁部が遺存するカワラケのうち、大皿は5個

体が確認される。ほとんどが口径10cm弱である。島城跡のものは、以下の4種に分類し得る。

【島城A種】体部下位で器壁が厚くなるものである。第2図9が該当し、口径も11cm程度と大形である。大宝城A種と対比される。

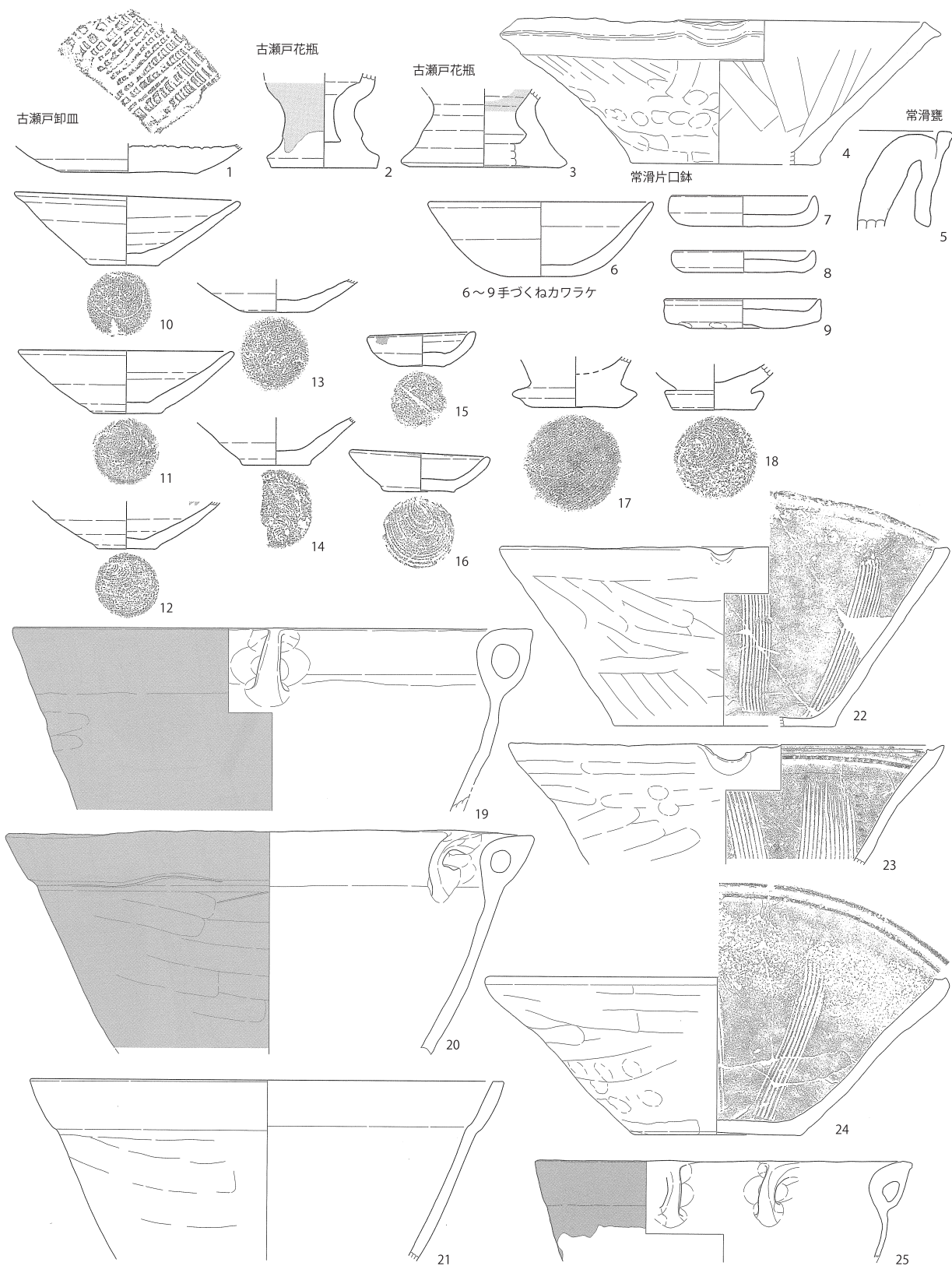
【島城B種】体部が薄く直線的なもので、体部内面にロクロナデが目立つ。第2図10が該当する。大宝城B種と対比される。

【島城C種】大宝城A種に近いが、サイズが小さく体部は厚手で口縁部が玉縁状に肥厚する。11・12が該当し、器壁の厚みから16・17もこれと同類であろう。

【島城D種】サイズが小さく体部は厚手である。第2図13である。島城C種に類似するが、底径が他のものより大きく、色調も褐色味を帯びる。時期的に後出するものであろうか。

このほか、口径6cm内外の小皿(18～21・23)も多く出土しており、扁平な形態で、内底面は同心円状の弱いロクロナデのあと、ヨコナデを加える手法が認められる。

堀跡からは、器高の高い土師質土器鍋が多く出土しているが、時期の詳細を窺う資料を欠く。遺跡全体からは多くの近世陶磁器に混じって、古瀬戸後期後半段階の縁釉小皿が2点程出土しており、城郭機能時期の一端を物語る遺物と考えてよいだろう。永正11年(1514)の『円福寺記録』には、和歌十郎の居所として「和賀郷島館」が見えており、少なくともこのころには和歌氏の居館であったことが窺われる(註3)。同記録によれば永正13年、足利政氏が岩槻に退去した際には多賀谷家植や和賀十郎、赤松高海がこれを護送したという。その後、和歌十郎は永正末年に北条氏に内通したとして多賀谷家植の命によって誅され、赤松民部が島館に入ったと伝わる(『多賀谷家譜』)。実際、出土したカワラケにもある程度の時期差が想定されるが、土鍋の様相や『円福寺記録』の記述も参照し、16世紀前～中頃を中心と



古河市本田遺跡（第3次）SD9

1~3・5~18 (S=1/3) 0 10 cm 4・19~25 (S=1/4) 0 10 cm

第3図 類例（2）

するものと考えておきたい。

古河市香取東遺跡（総和町教委 2001）（第2図下段）

発掘調査で複数個体の「大宝Ⅰ類」が出土しているが、特に5号井戸からまとまった資料が出土している。

5号井戸出土カワラケは、口径が9cm前後の大皿（8.8～9.6cm）と、6cm弱の小皿（5.8～5.9cm）に分けられる。個別に細分はしないが、サイズが小さく口唇部が肥厚するカワラケが含まれている点で、口縁端部がより丸みを帯びた印象を受ける。島城C種に類似点が多い。一方で小型化・厚手化しつつも、大宝城A種（39・40）、大宝城B種（38）の特徴を備えるものも含まれる。全体的に器壁が丸みをもって立ち上がるものが多い傾向にある。

5号井戸跡では、古瀬戸灰釉縁釉小皿1個体と志野鉄絵皿の細片、瓦質土器播鉢が出土している。このうち志野鉄絵皿は大窯段階まで遡るものではなく、連房式登窯段階の製品とみられる。他の遺物様相からして不自然であり、5号井戸上部に近世遺構が構築されている事を勘案すれば、混入遺物であろう。従って、本跡は古瀬戸後Ⅳ期とみられる灰釉縁釉小皿の年代観に近いと想定され、また、遺跡内出土の瓦質内耳土器がほとんど秋本分類のD群（秋本 2005）であることから、遺跡の主体は16世紀代とみられる。15世紀後葉から16世紀前半頃に位置付けておく。

古河市本田遺跡（第3図）（古河市教委・東京航業研究所 2015）

本田遺跡では、複数回の発掘調査で、かなりの中世遺構が検出されている。ここでは、第3次調査の成果を取り上げる。

第3次調査の第9号溝跡は全長130m以上が検出され、深さも1m以上ある。出土した坏形カワラケは、浅く直線的に開くもので、体部下位が厚くなり、底部には弱い板目圧痕がある。大皿2個体（10・11）は口径11.2・10.8cm、中皿（16）

は7.0cm、小皿（15）は5.2cmである。この種のものとしては大振りの大皿であることに留意したい。遺物には後世の混在もあるが、多量の内耳鍋が出土しているので、15世紀以降の所産であろう。陶器は常滑甕、片口鉢のほか、古瀬戸卸皿・仏花瓶が出土している。

このほか本田遺跡第4次の調査成果には、「大宝Ⅰ類」の初期の様相を示すものや、小山地域と共通する形態のカワラケが出土しており、坏形カワラケ出現期の様相を考える上でたいへん重要な遺跡である。本論の後半で再び触れたい。

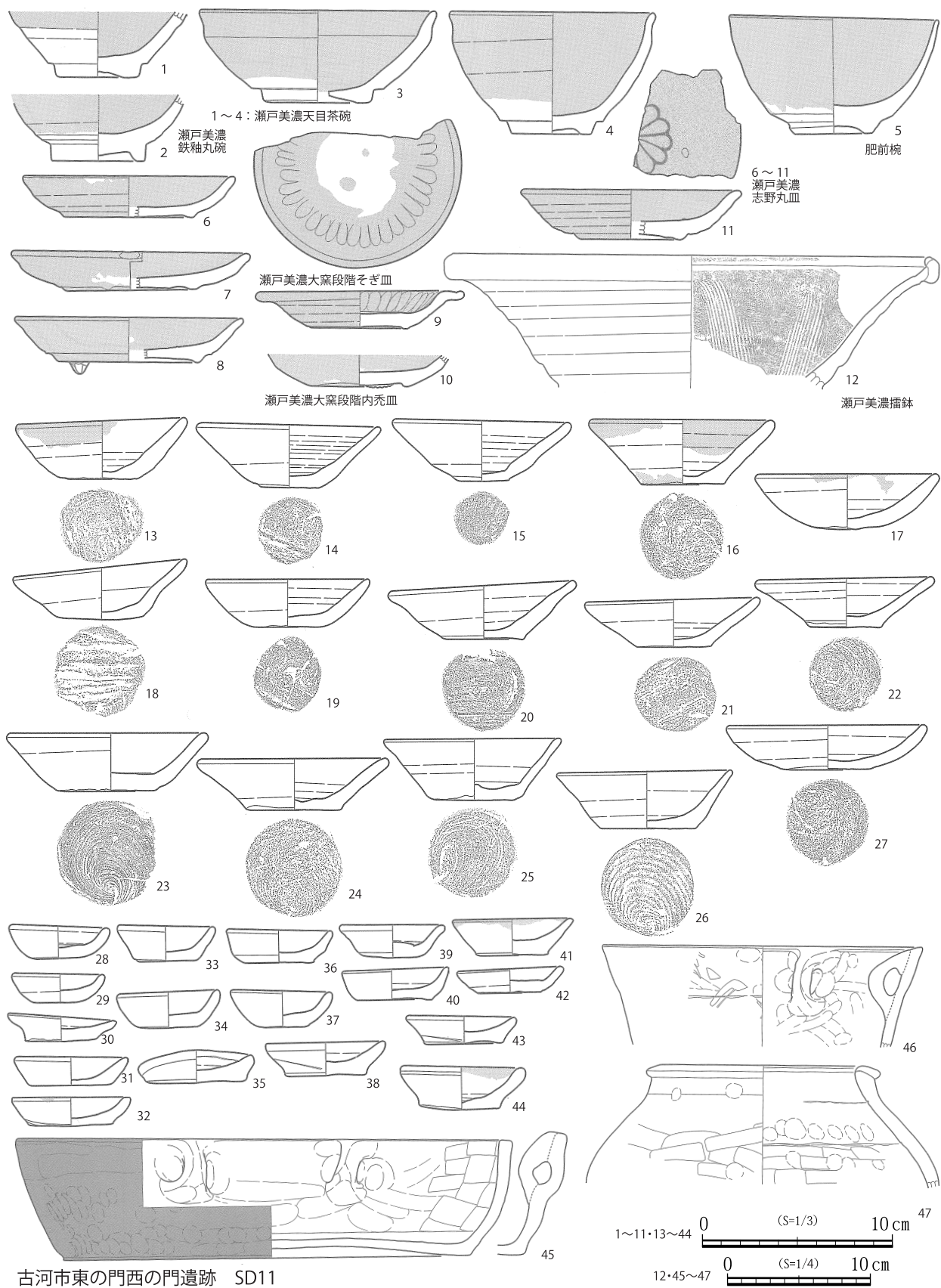
古河市東の門西の門城跡（古河市教委・東京航業研究所 2022）（第4図）

坏形カワラケの最終形態を窺わせる資料が多い。遺跡は瀬戸美濃系の大窯第3～4段階を主とし、一部連房式登窯段階の陶器を含む。総体的にはより大窯4段階によった時期の陶器が目立ち、16世紀末～17世紀初頭の様相を示す好例である。

以下、もっとも多くの土器類を出土した第11号溝跡の土器を取り上げる。大皿は概ね9～10cm内外のものが多い。器形と胎土から次の3種に大別でき、そのうちA1・2種が典型的な「大宝Ⅰ類」のものである。なお遺跡名は「東の門」と略称して記述する。

【東の門A種】坏形のもので、厚手で胎土はやや粗、灰白色系を呈するものが多い。以下の4つに細別される。

- ・A1種（13～18）、内底部を強く窪ます。底径がとても小さく、体部は直線的に開く。底部際の立ち上がり強く、底体部境がはっきりするA1a類と、底部がやや丸底ぎみに立ち上がるA1b類があるが、本質的には同類であろう。
- ・A2種（19～22）、A1類に準ずるが、体部の立ち上がる角度が浅く、器高が低い。
- ・A3種（23）、内底面に渦巻き状ナデを有し、中心が突出する。口縁部は直線的に立ち上がる。



第4図 類例(3)

・A 4 種 (24)、内底面に渦巻き状ナデを有す。口縁部が強く外反する。

【東の門B種】(25) A 種同様に坏形だが、底部径が大きく、胎土は精良・粉質である。内面の筋状で細かな回転ナデは目立たず、ただ中心を強く突出させる。体部中位から屈曲し外反する。色調は黄白色である。

【東の門C種】(26) 底径の大きな坏形で、橙色・硬質のものである。内底面は弱く渦巻き状ナデ、口縁部付近で屈曲・外反する。

【東の門D種】(27) 皿型を呈する。体部は丸く内湾しつつ立ち上がる。

このうちA 1・2種が、ここまで扱ってきた「大宝Ⅰ類」と直接の系譜関係にあるものと考えられ、特にA 1種は島城Cタイプとの類似性が強い。

大皿ではA 1種が圧倒的に多く、次いでA 2種が目立つ。一方小皿類(28～44)はバラエティがあって分類が難しいが、口径5～6センチ程度のものが多量に出土している。第11号溝跡に伴う陶磁器は、瀬戸美濃系陶器の志野丸皿が多い。不透明な長石釉が施釉され、厚手で口縁部が僅かに外反する器形は、美濃・高根山古窯跡群など大窯第4段階末頃のものである。天目茶碗も概ね大窯第4段階前後のもので、内禿皿も口唇部屈曲の短い大窯第4段階後葉～末のものである。加えて、肥前系陶器の丸碗が出土している。陶器の時期はかなりまとまっており、第11号溝跡は17世紀初頭頃の埋没と考えて問題無いであろう。内耳土器(45)は、器高の低い常陸系のものが複数出土しており、焙烙への移行段階を示す。先に例示した大宝城井戸跡のもの(第2図8)より耳の位置が高く、本遺跡例のものから大宝城例のものに、17世紀初頭から前葉にかけて変遷することが窺われる。

以上から、本跡のカワラケは16世紀末～17世紀初頭に時期が限定される。そして、その中でもっとも多いのが小型の「大宝Ⅰ類」であるA 1

種と、その器高が低くなったA 2種である。近世初期にあっても、この種のカワラケが引き続き使用されている点が明らかである。

3 埼玉県の様相

【①茨城県内の例に近い形態のもの】

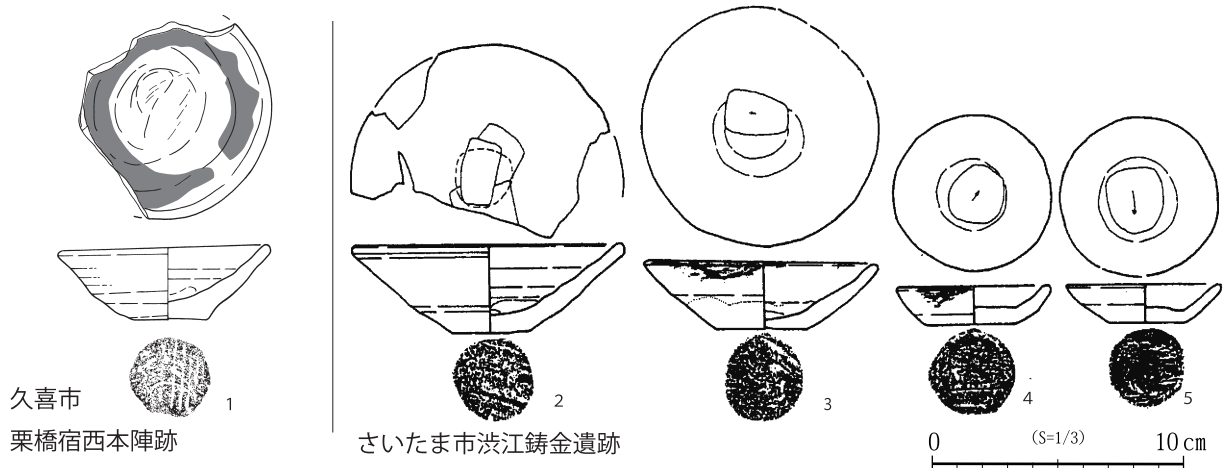
埼玉県では、ここ十数年で利根川周辺の調査が増加し、栗橋宿跡関連遺跡群・宮東遺跡・宮西遺跡・利根川旧堤防跡・東畑遺跡など、坏形のカワラケを伴う遺跡が複数知られるようになった。また、加須市騎西城跡の整理作業も進み、特に古い段階に多くの坏形カワラケを消費している点が明確になった。加えて客体的な分布状況は、さいたま市岩槻城跡周辺や、大宮台地部の遺跡でも認められている。ただし、これらの坏形カワラケにはややバラエティがあり注意を要する。以下に筆者が実見した例を中心にいくつか例示したい。まずは、茨城県西部のものと近い形態のものを扱う。

久喜市栗橋宿西本陣跡(埼玉文 2024)(第5図1)

久喜市栗橋宿関連遺跡群からは17世紀以降も坏形カワラケが出土するが、ここで扱うのは16世紀頃に遡る資料である。遺構に伴わない出土状況(第一面の遺構外遺物)であり、共伴遺物などは不明である。口径8.0、器高2.9、底径3.0cmで、灰白色を呈する。地理的にも茨城県に接する地域であるが、ほぼ茨城県西部で出土する「大宝Ⅰ類」と同じものと言える。体部中位で緩く屈曲、口縁部が僅かに膨らみ丸く収まる。サイズも小さく島城C種や香取東遺跡例に類似する。灯明具としての使用痕跡がある。

さいたま市岩槻区渋江鍔金遺跡(岩槻市教委 2001)(第5図2～5)

元荒川に隣接する遺跡で渋江鍔物師の関連遺跡とされている。第5地点において検出された堀1から2点の「大宝Ⅰ類」が出土した。また、これに伴う小皿とみられる資料もある。本遺跡では、遺物の出土層位が明確に押さえられており、共伴



第5図 類例(4)

遺物も比較的多い。

第5図2は口径11cm程、器高4cm弱、底径3cm強のカワラケで、体部下位が少し厚く大宝城A種としておきたいが、器壁厚みの変化は漸移的であり大宝城B種の要素も有している。内外面ともロクロ目が強く、内面は深く窪ましている。色調は褐灰色である。出土位置は堀底面より20cm程浮いた位置であり、堀1下層と認識される。

3は、口径9cm程、器高3cm弱、底径3.5cm程の大宝城A種であり、より扁平で底径が大きいものである。色調は灰白色を呈する。出土位置は堀底面から60cm以上浮いており、堀1上層に当たる。

堀の遺物は、上層に16世紀後半代の遺物が集中し、下層では16世紀前葉を下限とする遺物に集約される傾向があるとされる。また、上層から出土した文亀年間の板碑より、上層覆土の構成時期が16世紀初頭以降であることが窺われる。これらの諸条件から、本遺跡で出土した2点のカワラケには、ある程度の時期差がある可能性を考えておきたい。

さいたま市岩槻区岩槻城跡（さいたま市教委2008）（第6図）

二の丸第2地点S E 2の遺物に注目したい。井戸跡の一括資料である。この中に口径10cm内外

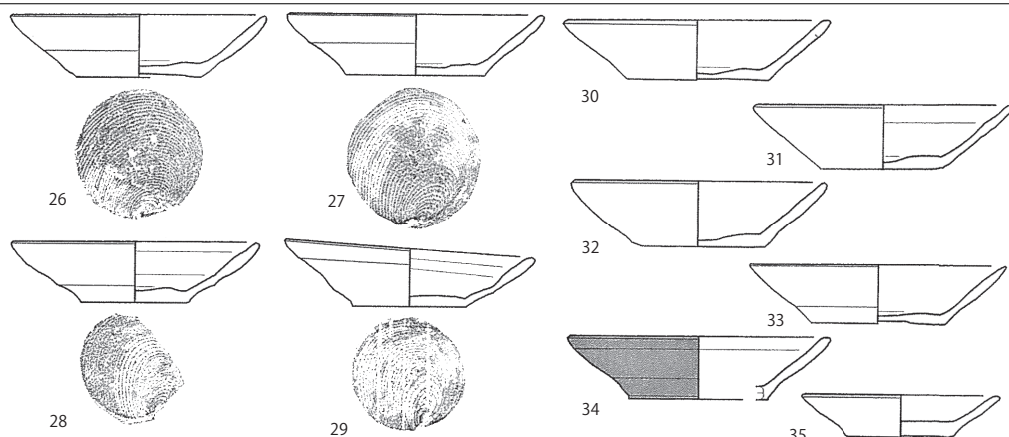
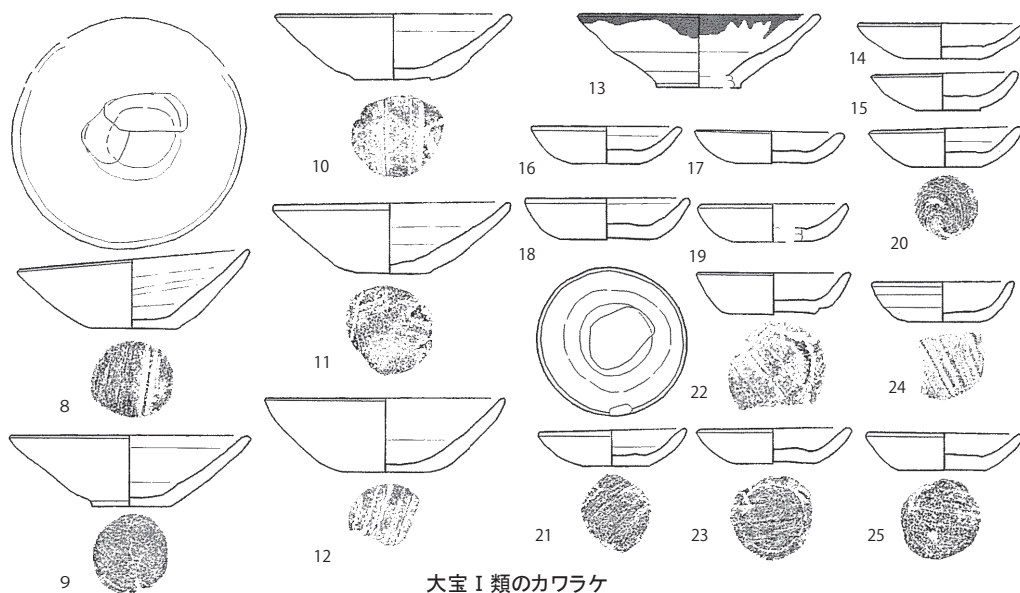
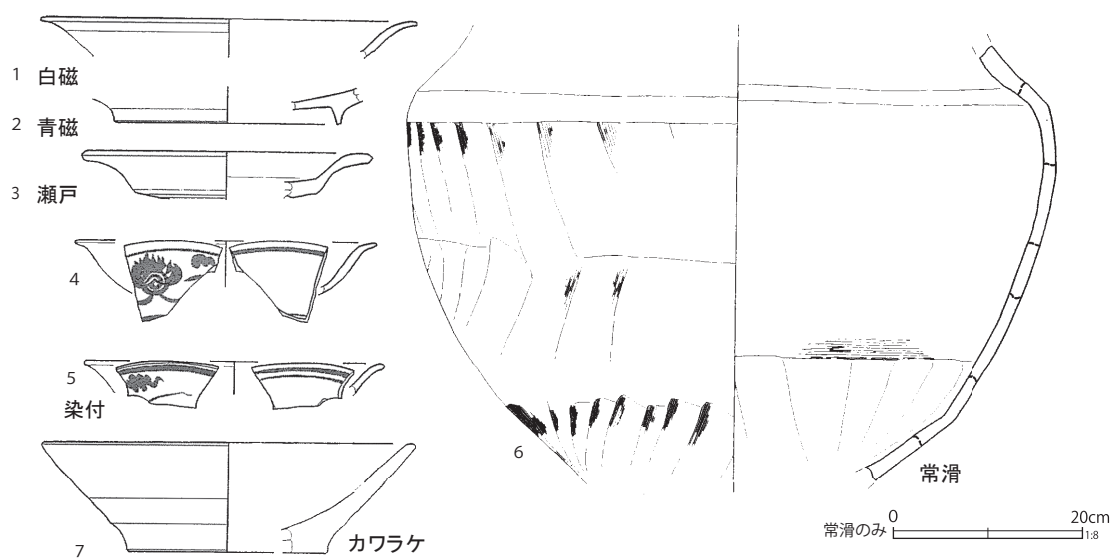
の「大宝I類」の大皿6点が含まれている（8～13）。13は唯一口縁部に煤が付着するものであり、器形から大宝城B種と同種とみられる。体部内面上位には比較的明瞭なロクロナデ痕が認められる。他方、他の5点は大宝城A種と同種である。

これらの大皿に伴うものとして、口径6cm内外の小皿12点を取り上げられている（15～25）。かなり扁平な形態のもので、内面は同心円状の弱いロクロナデのあと、ヨコナデを加える。

共伴の陶磁器は、染付皿B1群、瀬戸美濃系灰釉皿（大窯1か）等であり、年代観は、15世紀後葉～16世紀前葉である。また、一括で出土した「左回転糸切り」のカワラケ（26～35）は、東京都葛西城や千葉県北東部の小金城・根木内城出土資料に類例が認められ、やはり15世紀後葉～16世紀前葉に出現することが指摘されている（永越2012）。

【②その他の坏形かわらけ】

埼玉県下では、「大宝I類」の特徴にほぼ準ずるが、より厚手で重く、体部の形態に変異があるものも認められる。その地域的特色を明確化するため、あえて「その他の坏形カワラケ」として別にまとめた。これらも広義では「大宝I類」といえるだろう。なお、「狭義の大宝I類」（＝後に分類する坏I類）という場合は、以下の諸例を含ま

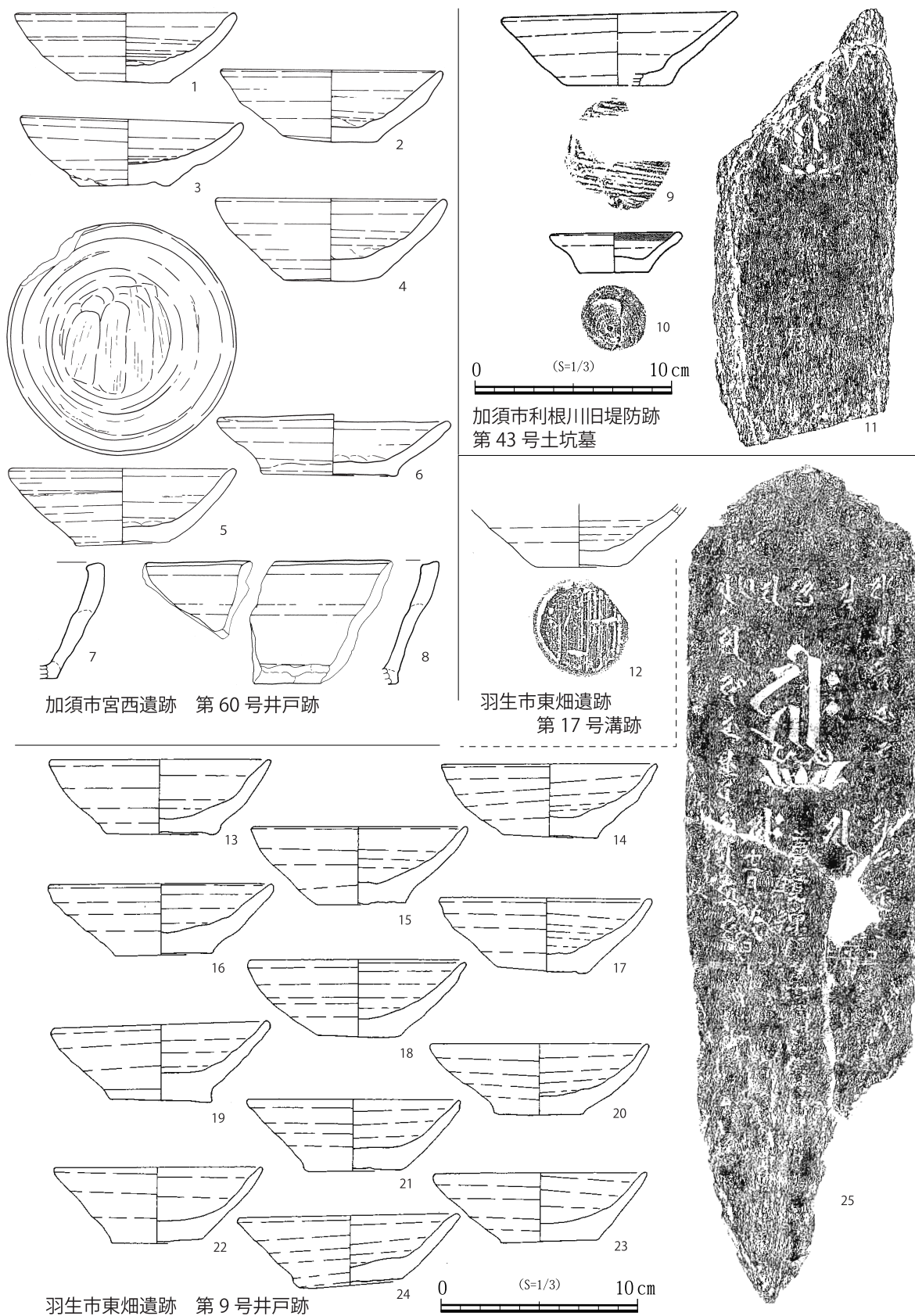


さいたま市岩槻城二の丸
第2地点 SE2

左回転系切のカワラケ

0 (S=1/3) 10 cm

第6図 類例(5)



第7図 類例(6)

ないものとする。

加須市宮西遺跡（埼玉文 2022）（第7図左上）

利根川右岸、低地帯に位置する。概ね 15 世紀以降の集落と思われる。ここでは、第 60 号井戸跡の一括資料を扱う。全て内底面にヨコナデを伴うものであるが、第 7 図 1～5 は、高い坏形のもので、口径 10.9～11.4cm、器高 3.5～4.0cm、底径 4.5～5.0cm である。かなり厚手で器壁がやや内湾しながら立ち上がる。内底面は一方向から 2～3 回、強くなでつけされ、窪んでいる。色調は灰白色のものが多く、胎土は粗い。これを「宮西タイプ」と仮称としておく。実はこのタイプが埼玉県では多く分布するものである。第 7 図 6 はこれらと形態が異なり、回転も左回転である。遺構からは背がやや高い焙烙（7・8）が出土している。近年の騎西城跡での検討から、焙烙の出現が 15 世紀後半まで遡る可能性もあるが、概ね 16 世紀前半～中頃と推定しておきたい。

加須市利根川旧堤防跡（埼玉文 2019）（第7図右上・第8図）

利根川の堤防下から検出された遺構のうち、第 43 号土墳墓と、旧河道跡の遺物を扱う。

まず、第 43 号土墳墓では、板碑とカワラケ 2 点、永楽通宝 6 枚が同じ墓坑内から出土している（第 7 図 9～11）。カワラケは大皿 1 点、小皿 1 点が出土している。

大皿（9）は灰白色系で、底部に板状圧痕を伴う。口径 11.4、器高 3.6、底径 5.4cm。器形は底部付近で括れ、そこから直線的に立ち上がり口縁部に至る。内底面を強く窪ませるが、器形の括れの形に合わせてかなり広く窪んでいる。

小皿（10）は口径 6.2、器高 2.0、底径 3.4cm。浅黄橙色系で、内底面は窪まず、体部は外反しながら立ち上がる。このタイプの小皿は、「大宝Ⅰ類」の組成にはあまりみられない。ただし、古河市東の門西の門遺跡の小皿には同タイプのものが散見されるので、時期的に後出的な要素を持つもので

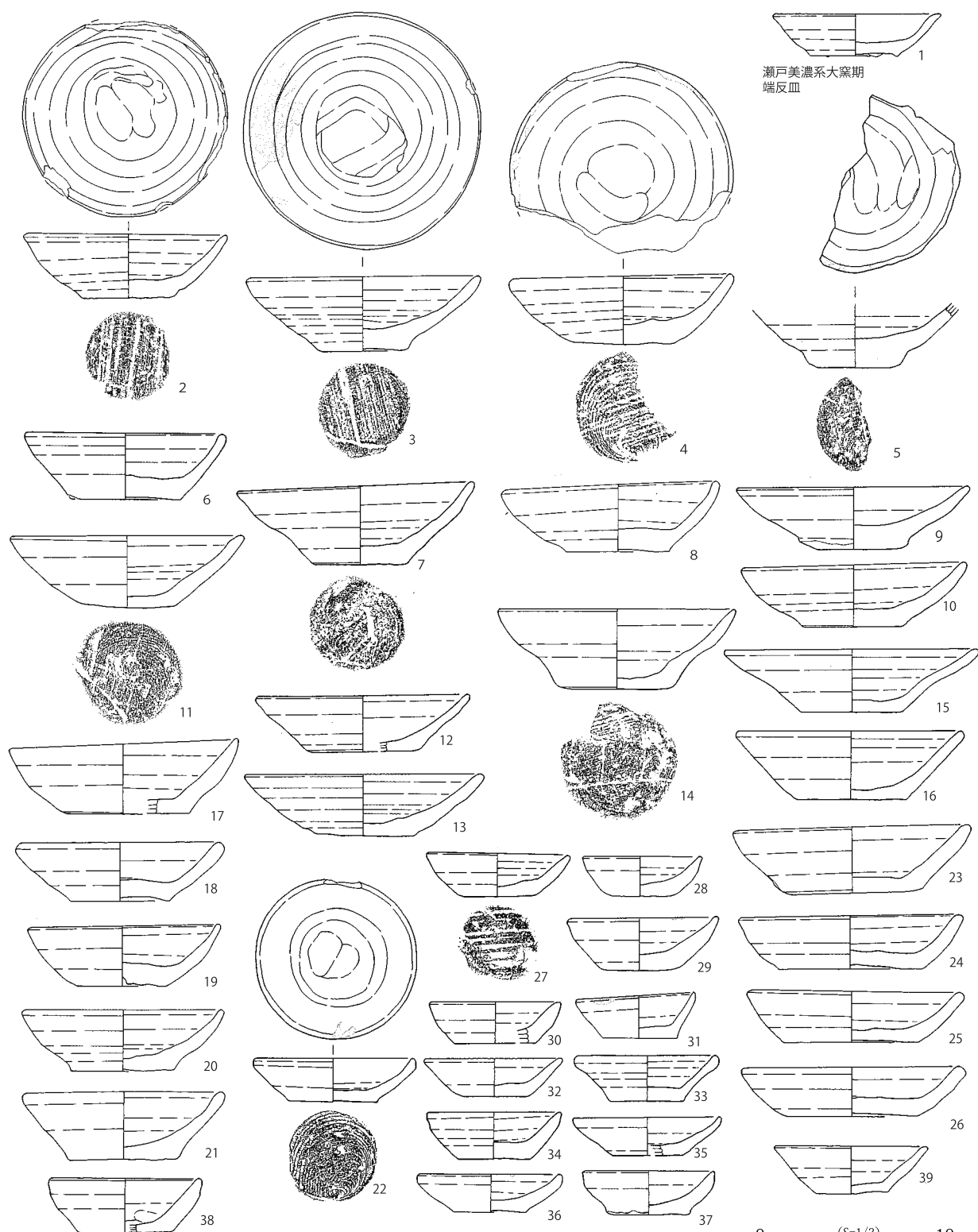
あろう。

次いで旧河道のカワラケを図示した（第 8 図）。旧河道は土墳墓群の一部を壊しており、出土したカワラケの多くは墓の副葬品だった可能性がある。遺構の性格もあろうが、カワラケに形態差が大きいことを確認したい。さしあたり分類は行わず、大宝Ⅰ類との対比から特徴的なものを解説しておく。

2、4、5 はいずれも小さな底部から直線的に立ち上がる大宝Ⅰ類の特徴から外れるが、灰白～浅黄橙色系の色調で粗い胎土に共通性もある。4 は底径が広く、5 は底部で括れ内底面を撫でるが、ほとんど窪みが無い。他方、7 は「狭義の大宝Ⅰ類」に近いが、口縁部が屈曲する点が異なっており、体部下方でやや括れて内湾気味になる。「宮西タイプ」であろう。9 は灰白色～浅黄橙色系で 5 を小型化したような器形である。11 はほぼ「大宝Ⅰ種 A 種」の特徴を備えるもので、「狭義の大宝Ⅰ類」に近い。口径は 11cm 程度である。12・13 は浅黄橙色系で低い坏形、14 は内底面の窪みが大きく、体部が内湾しながら立ち上がる浅黄橙色系のものである。第 43 号土墳墓のカワラケより内湾が強いが、形態的には通じるものがある。陶磁器には大窯第 1 段階の端反皿が含まれる。土墳墓にも第 43 号土墳墓のように永正期以降の土墳墓があるので、墓群の一角を壊している河川は 15 世紀後葉から 16 世紀前半にかけての遺物を広く含むものであろう。当該地域におけるカワラケの多様性が窺われる出土状況である。

羽生市東畑遺跡（埼玉県埋文事業団 2018）（第7図下）

立地は宮西遺跡とほぼ同じだが、より上流側に位置する。第 9 号井戸跡から 12 点の坏形のカワラケが出土している（第 7 図 13～24）。カワラケは口径 10.4～11.1cm、器高 3.5～4.1cm、底径 4.3～5.5cm で規格的である。厚手で、器壁は僅かに内湾しつつ立ち上がり、底部付近で強く括



加須市利根川旧堤防跡 旧河川

第8図 類例(7)

れる傾向がある。宮西遺跡の例と比較すると僅かにサイズが小さく、内面のロクロ目がより強く現れる点に違いがあるが、ほぼ同系統のものであろう。色調は灰白色～浅黄橙色で、胎土は粗である。

出土状態は多数の板碑が投棄された上からまともに出て出土している。いずれも遺存程度が高く、井戸の埋め戻しや板碑の埋置に伴い、意図的に埋納されたものとおもわれる。板碑のなかに紀年銘残画と干支から明応八年（1499）と推定されるもの（25）があり、遺物の埋納時期は16世紀前半以降と考えて良いだろう。

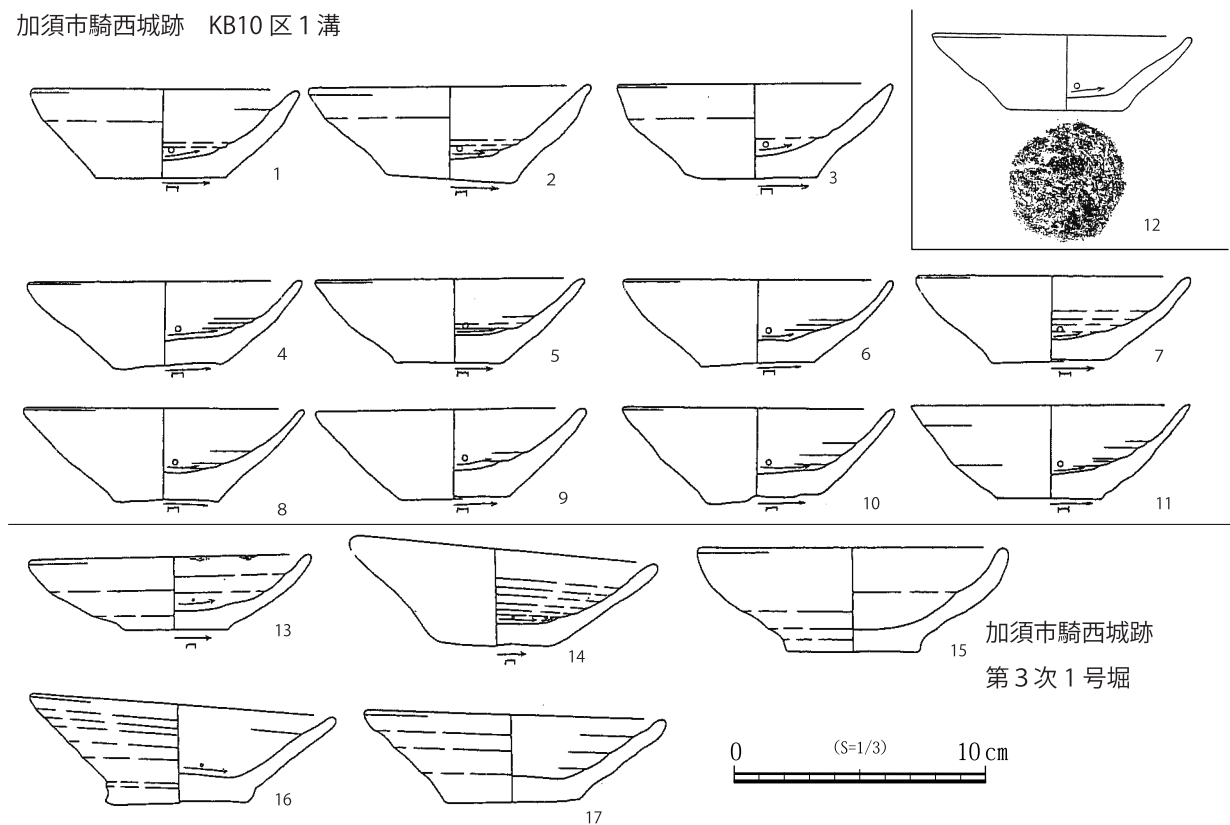
なお、近世に帰属する第17号溝跡からは、小さい底径から直線的に立ち上がる坏形カワラケが出土している（第7図12）。内底面は強く二回ほどなで付けされている。これは、茨城県西部側でみられる「狭義の大宝Ⅰ類」の特徴を備える資料である。

加須市騎西城跡（加須市教委 2019）（第9図）

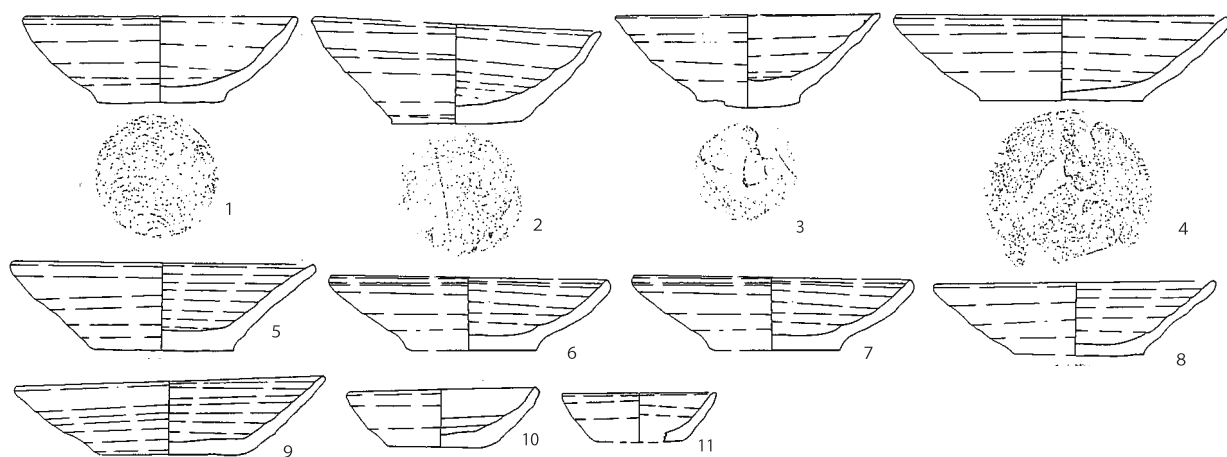
戦国期から江戸初期の城と城下の調査が行われている騎西城跡では、現在も整理作業が継続中である。ここでは、2019年の報告で検討が行われたKB（騎西城武家屋敷）10区1溝の資料を中心に扱う。記載の内容は、主に加須市埋蔵文化財報告第12集（加須市教委 2019）の内容を踏まえている。

KB 10区1溝のカワラケ集中では、報告書でⅠ類aとされた皿形内湾形のものと、Ⅱ類aとされた碗形内湾形のものがある。ここで注目したいのは後者で、小さな底径から僅かに内湾して立ち上がる形態である（第9図1～11）。底部の板圧痕も認められる。ただし、茨城県西部域のものと比較して全体的に胎土が緻密で、色調にもぶい橙色系のものが多い印象である（4～11）。また、こういったものは内底面の一方向ナデも弱い。一方、数は少数だが、より灰白色味を帯びて厚手で、底部付近で少し括れ中位に稜がでるものもみられ

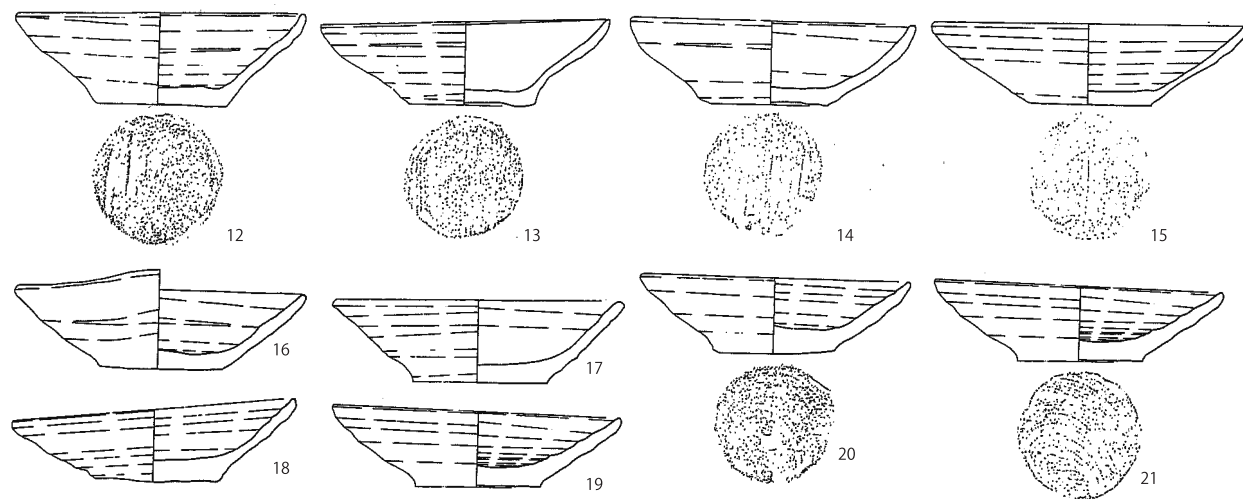
加須市騎西城跡 KB10区1溝



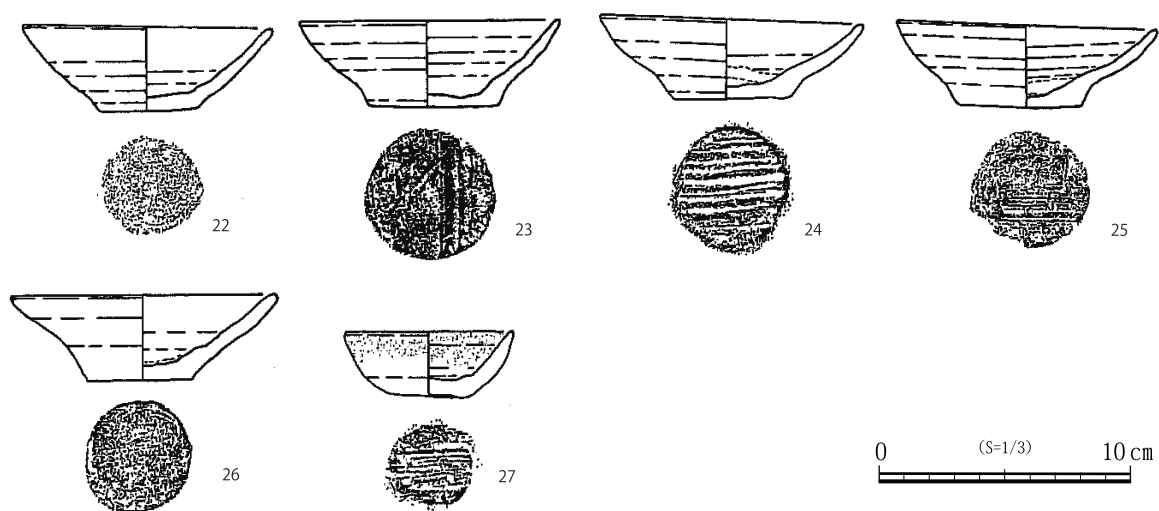
第9図 類例（8）



行田市忍城跡 14 層



行田市忍城跡 13 層



熊谷市諏訪木遺跡

第 10 図 類例 (9)

る。これらは概して内底面の押し込みが強いようである（1～3）。両者の中間的な様相もあり厳密な細分は難しいが、後者（1～3）のタイプが「宮西タイプ」と同じタイプのものと思われる。報告書では出土レベルの精査から、瀬戸美濃大窯第1段階の播鉢3点を併出とし、15世紀末～16世紀前半に比定する。

なお、KB10区1溝一括で出土したカワラケの中には、「狭義の大宝Ⅰ類」として良いものも含まれている（第9図12）。灯明皿として用いられた灰白色のカワラケで、小さな底部から体部はほぼ直線的に立ち上がる。ここでも東畑遺跡や利根川旧堤防跡同様に、客体的に「狭義の大宝Ⅰ類」が認められる。

行田市忍城跡（行田市郷土博物館1989）（第10図上段・中段）

本丸と二の丸の間の堀を調査した際の遺物（第2次調査）を取り上げる。出土したカワラケにはかなり多様性があり、全体を把握しきれないので、本稿に関連する一部を取り上げたい。主に二種のカワラケ（忍城A種・B種）について記述する。
【忍城A種】堀の最下層である第14層の遺物（第10図1～11）では、体部が丸味を帯び、少し内湾しながら立ち上がる1～3が出土している。これを忍城A種とする。色調は灰白～浅黄橙色であり、内底面を三回程度ヨコナデしているがあまり窪まない。底部には板目状圧痕がある。口径11.0～11.6、器高3.3～3.9、底径4.5～5.2cmである。器形、サイズともに宮西タイプと類似するが、胎土は若干精良な印象である。

なお、同じく底部が小さい坏形を呈する4は、橙褐色を呈するもので、騎西城KB10区1溝のカワラケ集中の主体を為すものと類似するよう思う。

【忍城B種】第13層（第10図12～21）では、口径11.5cmと大振りで、底部付近で強く括れるものが認められる（12～14）。これを忍城B種

とする。内底面は一方向に弱くナデを加えるが、その部分のみ窪む様子はみられず、むしろ器形の括れによって広く窪む印象である。色調や厚みに変異があり、12は橙色系胎土で薄手、13・14は灰白～黄褐色でやや厚手である。第13層にみられる類は、騎西城3次1堀の例（第9図16・17）などに類似点もあるが、底部の括れが強い点が特徴的である。内底面の一方向ナデ、小さな底と板目圧痕に共通点はあるが、大宝Ⅰ類からはかなり隔たった特徴の一群としてみておきたい。そして、次の熊谷市諏訪木遺跡のものに類例を認める点から、埼玉県域を中心としたエリアで固有の変遷を遂げているものと考えたい。

熊谷市諏訪木遺跡（熊谷市教委2020）（第10図下段）

熊谷市東部の低地帯に位置する遺跡で、先の忍城から5キロ強の近距離である。坏形カワラケの多量出土や器種交代を評価し、古河公方足利成氏が在陣した「成田陣」との関係が指摘される（腰塚2020）。数次にわたる調査が実施されているが、ここでは平成28・29年度調査の第14号溝跡例を取り上げる。第14号溝跡からは坏形のカワラケがまとまって出土している。口径は10.2～10.6、器高3.2～3.4、底径3.9～5.2cmである。形態から二種に分けられる。

【諏訪木A種】（22）体部下位の屈曲が無く丸みが強いもので、宮西タイプと類似する。

【諏訪木B種】（23～27）体部下位で強く括れ、そこから直線的に立ち上がる。形態的には加須市利根川旧堤防第43号土壙墓（永正十年銘板碑併出）と同タイプである。また、忍城第2次13層のものに近いが、サイズが小さい点と内底面のナデがより強い点に相違も認める。

A・B両種は胎土が類似し、近しい関係のもとで制作したことが示唆される。報告書では15世紀後半と推定しているが、利根川旧堤防跡例との対比から、16世紀前半に下る可能性が高い。

4 坏形カワラケの分類と時期

ここまで各地域の坏形カワラケについて概観してきた。その結果、茨城県西部と埼玉県北西部では、若干異なった特徴の坏形カワラケが存在することがみえてきた。以下に大皿に対して型式（大型式）を設定したい。設定にあたってはまず、各遺跡の分類結果（小型式）を基準とする。第1表には、各地域・各遺跡例の併行関係を想定して示した。これを元に、遺跡間・小型式間にまたがる型式を設定したい。

まず、大枠の分類で、茨城県西部を中心とするもの（狭義の大宝Ⅰ類）に坏Ⅰ類、埼玉県北西部を中心とするもの（その他の坏形土器）に坏Ⅱ類の数字を与える。その中で、各遺跡で検討した種別から同一の型式と認識し得るものを、A、B、C…と細分した。従ってこれらの「型式」は「小地域毎のタイプ差」と「時期差」のいずれを含む場合もあり得る。地域別に坏Ⅰ・Ⅱを大別するのは本来、型式操作としては不適當だが、ここまでの検討で地域的分類の有効性が確認できるので、作業単位的に用いたいと思う。では、茨城県西部を中心とした坏Ⅰ類を分類する。

（坏Ⅰ類Aタイプ） 口径10cm以上で、体部は直線的に開き、器壁が下位で厚くなり、内底を窪ますものである。大宝城A種、島城A種、本田遺跡3次9号溝跡、岩槻城跡の例がある。これを坏Ⅰ類Aタイプとする。

共伴遺物に恵まれないが、後述するように、次第に口径が小さくなる変遷が想定される。口径11cm以上のものがより古く、少なくとも15世紀後半には出現するものとする。このタイプは、岩槻城跡で口径10cm前後にまで縮小し、また、口径9cm台の古河市香取東遺跡にも同形態のものがみられる。おそらく16世紀前葉までに縮小し、次の坏Ⅰ類Cタイプへ変遷するものであろう。

（坏Ⅰ類Bタイプ） 口径10cm以下のものが主で、体部は直線的に開き、器壁の厚さが一定のもので

ある。大宝城B種、島城B種のほか、岩槻城の資料にも認められる。これを坏Ⅰ類Bタイプとする。大多数が坏Ⅰ類Aタイプと併存するので、次の坏Ⅰ類Cタイプに変遷する過程の一類型かもしれない。時期も概ね坏Ⅰ類Aタイプと併存とみられるが、口径の大きいものが見当たらないので、そのなかでも後半に主体がある可能性がある。

（坏Ⅰ類Cタイプ） 口径8～9cm台、口縁部が肥高するものがある。厚手・小型のものである。島城C種、香取東遺跡5号井戸跡の例がある。栗橋宿西本陣跡の例もこのタイプである。共伴遺物と他型式との関係から、16世紀前半～中頃とみられるが、次の坏Ⅰ類Dタイプと形態差に乏しく、その後あまり変化なくDタイプに移行する可能性がある。

（坏Ⅰ類Dタイプ） 口径9cm前後、器壁は厚手である。体部はまったく内湾せず、直線的に立ち上がる。口縁部の肥厚はみられない。内面のロクロ目は比較的明瞭である。また内底面を強く窪ますものが多い。東の門A1種である。現状では東の門西の門遺跡から多量に出土するだけなので、分布は局所的かもしれない。時期は16世紀末～17世紀初頭である。なお、同形態の器高が低いもの（東の門A2種）が共伴するのは大きな特徴であり、大宝城C種（17世紀前葉頃）が同タイプのものとみられる。

以上、坏Ⅰ類は15世紀後半～16世紀前半の事例が多く、この頃が最盛期と思われる。その分布は茨城県西部を中心とし、栃木県南部にも広く分布する可能性が高い。また、埼玉県では岩槻周辺に認められるが、その間の地域にも分布しているのか否かは検証し得ていない。筆者の知るところでは蓮田市新井堀の内遺跡から少数の出土例があるが、岩槻城跡二の丸の出土状態はまとまっていて、やはり中核的な城館ならではの出土状況ではなかろうか。その後、東の門西の門遺跡では17世紀初頭にも多量に消費されており、坏Ⅰ類

Cタイプは大きな形態変化をせずに16世紀後半まで使用され続けていたものと思われる。

次いで、埼玉県方面の坏2類をみてみたい。全体として、厚手で重く、体部の丸みが強い。既に秋本（2008）がC類としてまとめたものに相当するだろう。

（坏2類Aタイプ）「宮西タイプ」である。体部がやや丸みを帯び、内底面を一方向に撫でるが、窪みはあまり強くない。体部は少し内湾して立ち上がる。やや厚手で重い印象である。宮西遺跡第60号井戸、東畑遺跡第9号井戸例が該当するが、口径の縮小化と、底部付近の括れが次第に強くなる傾向で、前者から後者へ変遷すると予察したい。騎西城K B 10区1溝の灰白色・厚手のものにこれらとほぼ同タイプのものがあるほか、忍城堀最下層の忍城A種や諏訪木A種も本類であろう。宮西・東畑・騎西城例から15世紀末～16世紀前葉に比定できる。茨城県西部の坏1類A～Cタイプの変遷過程に併存する、埼玉県北西部の土器と考えて良いであろう。諏訪木A種・B種の出土状況により、次の坏2類Bタイプと併存する時期があると考えられる。

（坏2類Bタイプ）体部下位の括れが大きい一群である。利根川旧堤防跡第43号土坑墓の大皿、忍城B種、諏訪木B種が該当する。前述のように、熊谷市諏訪木遺跡では坏2類Aタイプと共伴しており、胎土も類似する。諏訪木遺跡のB種は灰白色の厚手のもので、利根川旧堤防跡第43号土坑墓と同タイプとみられる。後者から永正十年銘の板碑が出土しており、1513年以降のものである。

本類は、騎西城3次1堀のⅡ類（第9図16・17）に形態が通じ、併行する可能性がある。騎西城3次1堀の時期は15世紀末～16世紀前半と推定されており、先の板碑紀年銘とも矛盾しない。また、この類は、忍城堀13層に大型のものが認められる。層位関係も考慮して、概ね16世紀前半から中頃にかけてのタイプと推定するが、その前半で坏2類Aタイプと併存期間があると推定される。

（坏2類Cタイプ）坏2類Bタイプに準ずるが底部を窪ませず、上げ底状に厚くなる類型が利根川旧堤防跡などで出土している（第8図5・9）。詳細は不明だが、Bタイプに後続するものと推定したい。また、この類は群馬県館林市内の出土品に類例が多いようなので、分布域は東毛エリアに広がる可能性が高い（館林市史編さん委員会2010）。

（坏2類Dタイプ）にぶい黄橙褐色系のカワラケで、騎西城K B 10区1溝の主体を占める。騎西城跡の整理の進展によって位置付けを再考するかもしれないが、仮にDタイプを充てておく。利根川旧堤防跡や忍城に類似種がみられるので、周辺で類例を捜す意義はあるだろう。

（編年）以上の分類を踏まえて、編年を行う（第11図）。

坏1類A～Dタイプは、同系統で、概ね時期差であろう。Aの出現時期は次節を参照されたい。各型式は漸移的変遷だが、A・Bは15世紀後半に出現し、Bがやや後出するらしい。小型化した岩槻城資料から大窯1段階頃（16世紀前葉）ま

表1 各遺跡出土例の対応関係

推定時期	茨城県西部					埼玉県東部		埼玉県北西部					
	大宝城跡	島城跡	香取東遺跡	本田遺跡	東の門西の門遺跡	岩槻城二の丸	渋江鍔金遺跡	宮西遺跡	東畑遺跡	利根川旧堤防	騎西城跡	忍城跡	諏訪木遺跡
15C後	大宝A種	島城A種	SE5	3次SD9		SE2	堀1下層	SE60	SE9		KB10.1溝	忍城A種	諏訪木
15C末～16C初	大宝B種	島城B種											
16C前～中		島城C種					堀1上層			43土坑墓	騎西城3区1堀	忍城B種	A・B種
16C後													
16C末	大宝C種				東の門A～D種								

では存在する。Cは後出し、不確実ながら島城の永正期頃の記録を元に16世紀前葉以降とする。16世紀後半の資料に乏しいが、Dは東の門西の門遺跡の遺物から16世紀末～17世紀初頭まで降る。

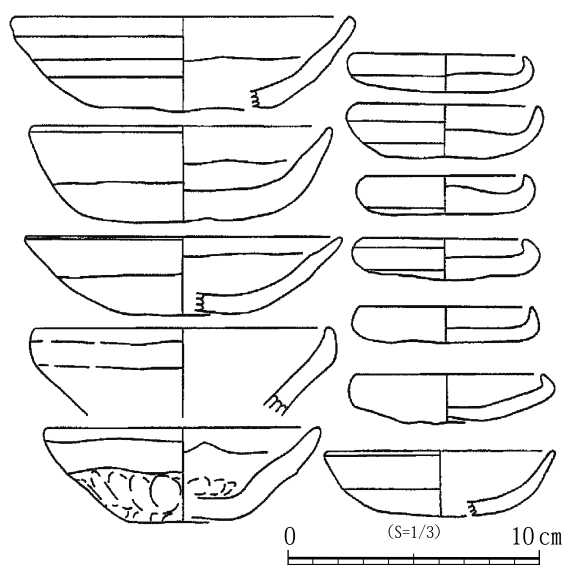
坏2類のA～Dタイプは、器形や胎土色調に差異があり、特にDについては別系統の可能性もある。これらのうち、熊谷市諏訪木遺跡の共伴例からA→Bには一定の系譜性と時期差があるようだ。Aは東畑遺跡・騎西城KB10・1溝の例から16世紀前葉には存在し、15世紀末以前の出現だろう。Bは利根川旧堤防の土壌墓例から、永正10年を含む16世紀前葉以降に位置付けられる。諏訪木遺跡の例と前後して、A→Bに変遷するとすれば、忍城第14層→13層の遺物がそれと対応するだろう。さらにCがそれと絡む可能性が高いが、現状では検討し得ていない。

5 坏形カワラケの出現過程

埼玉・茨城両県の坏形カワラケについて型式・編年を検討してきた。では、このタイプはどのようにして出現し広まったのだろうか。初現を考えるにあたって、当該地域のカワラケについて、前史から位置づけておきたい。

茨城県西部地域における14世紀～15世紀代におけるカワラケの様相を考える上で注目されるのは、非ロクロ系とされる手づくねカワラケの存在である。12世紀代に関東に出現したと考えられる手づくねカワラケは、鎌倉では13世紀中葉頃に消滅するらしい(馬淵2002)が、他地域では、それよりやや遅い時期まで命脈を保つようであり、埼玉県内でも少なくとも13世紀後半までは存在するようである(中世を歩く会2002・水口2016)。一方、茨城県南部地域においては、15世紀中葉頃までかなり主体的に存在していたことが指摘されている(川村2011・2018)。

茨城県西地域における手づくねカワラケの出



第12図 長福城跡の手づくねカワラケ(註4文献)

現は、少なくとも13世紀初頭にまで遡り(村山2010・川村2018)、また、栃木県南部においても、宇都宮城出土の手づくねカワラケが13世紀前葉まで遡る資料と位置づけられる(荒川2007・水口2016・今平2017)。以後、13世紀後半から14世紀にかけての資料は、結城市須久毛塚古墳中世墓(榎武蔵文化財研究所ほか2010)、下妻市大宝城跡(下妻市教委2012、村山2013、赤井2020)、下妻市伊古田遺跡(下妻市教委2012)等で確認されている。栃木県小山市内でも小山市長福城跡を始め多くの遺跡から確認されていることから、14世紀前後には、茨城県西部及び栃木県南部も手づくねカワラケが主体的に分布する地域と捉えることが妥当であろう。

第12図は栃木県小山市長福城跡の堀から出土した資料である(註4)。時期的な幅もあるだろうが、主体は14世紀代とみられ、小山市域でもっとも普遍的な手づくねカワラケの様相を示すものである。

一方で小山市祇園城跡第3号方形竪穴遺構からは、ロクロカワラケや古瀬戸後期Ⅰ・Ⅱ期の陶磁器とともに内面に巴紋を墨書した手づくねカワラ

ケが1点出土している（小山市教委 2002）。墨書があることから特殊な資料の可能性もあるが、小山地域における手づくねカワラケの終焉を示す資料とみて良いであろう。断片的な資料からではあるが、15世紀はじめ頃まで、茨城県西地域及び栃木県南部の一部地域においては手づくねカワラケが採用されていたのではないかと考えられる。

ところで、仔細にみると茨城県南部（つくば市周辺）と栃木県小山市周辺のカワラケには形態差があり、特に14世紀頃のものに顕著である。茨城県南部のものは半球形で厚手化が進むのに対し、小山市周辺では口縁部が外反ぎみに開く深手の鉢形を呈するものが主体で（第12図）、「小山系」とでも言い得る様相を示す。では、茨城県西部地域ではどうであろうか。下妻市大宝城跡の事例では、ほぼ茨城県南部の状況と類似の様相である（村山 2013）。ところが、古河市本田遺跡では小山市周辺と共通する鉢形のものが出土しており（古河市教委ほか 2016）、下野に隣接する古河市周辺では小山系の手づくねカワラケも使用されていたことが窺われる。第3図6に示した本田遺跡SD9の例は小山系の手づくねカワラケである（なお遺構の時期とは乖離がある）。

では、前史として存在する手づくねカワラケの分布地域を念頭に、15世紀前半頃のロクロカワラケを検討したい。第13図は栃木県小山市祇園城跡第1号～3号方形竪穴遺構、第14図は第5号方形竪穴遺構の資料である（小山市教委 2002）。いずれも口径が12～15cm前後のロクロカワラケが出土している。共伴の陶磁器類には中国陶磁器もあるが、常滑8型式が認められ、瀬戸製品は遅くみても古瀬戸後Ⅲ期まで、大部分は後Ⅰ・Ⅱ期で占められている。祇園城跡における当該期のカワラケは、器壁はほぼ直線的に立ち上がり、口縁部辺りで若干内湾する点が特徴的である。このような、「器壁が薄く、ほぼ直線的に立ち上がる、大ぶりの環形カワラケ」を15世紀前

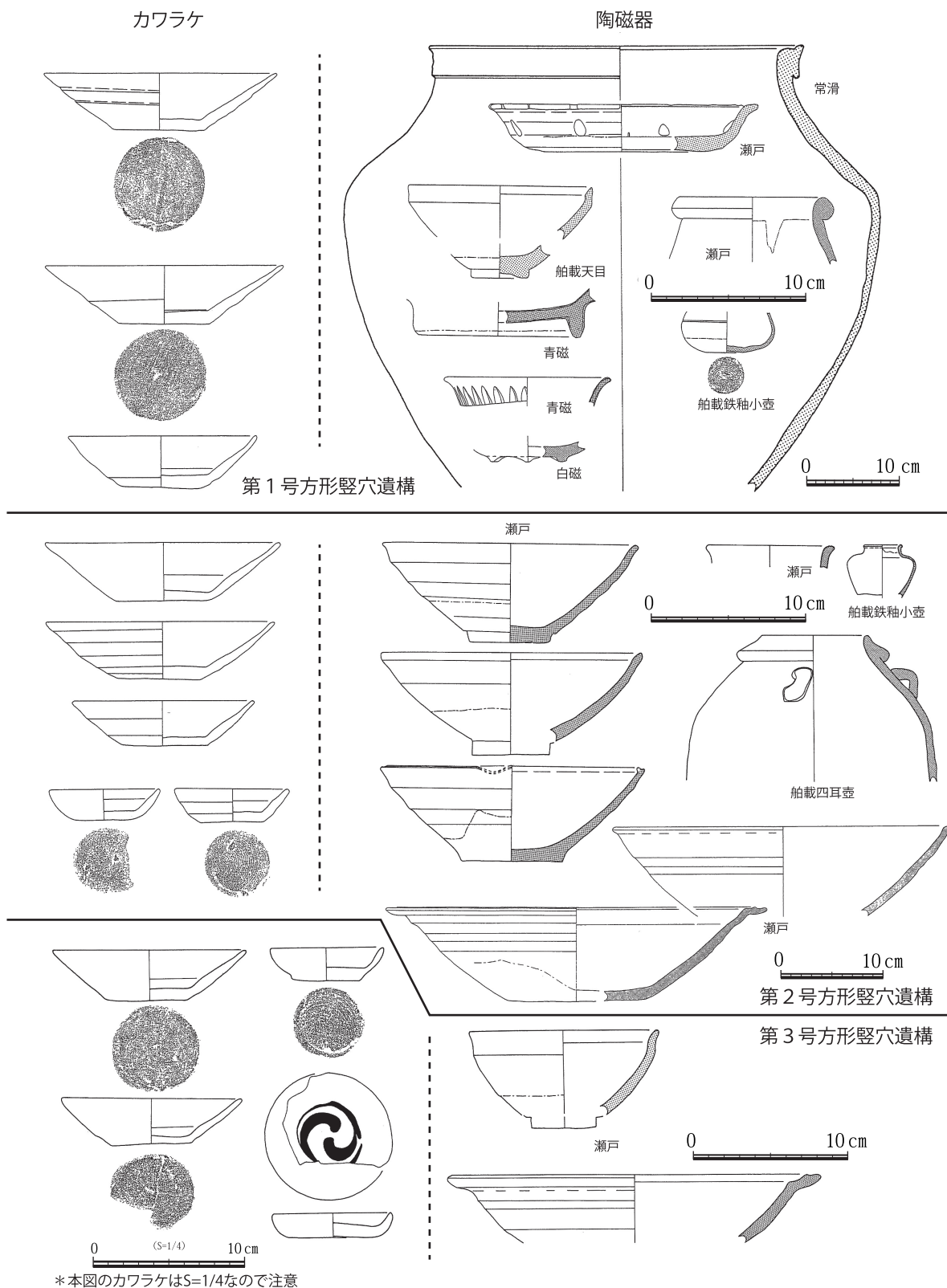
半におけるロクロカワラケの指標的形態と認識することが可能であろう。本稿では「祇園城タイプ」と仮称しておきたい。

祇園城タイプと類似する資料は、古河市本田遺跡（第4次調査）の複数の遺構から出土している（古河市教委ほか 2016）。第15図1～9に示した第4次第95号溝跡では、古瀬戸後Ⅰ～Ⅱ期の天目茶碗、中期様式の折縁深皿とともに祇園城タイプのロクロカワラケ（口径12.0・13.6cm）、厚手小型の手づくねカワラケも出土しており、祇園城跡方形竪穴の在り方とよく似ている。前述のように本遺跡では14世紀代の手づくねカワラケ（第3図6）も出土している。その形態は鉢形を呈する小山系の手づくねカワラケであった。14世紀～15世紀前半にわたって、両地域のカワラケに共通性があったことが窺われる。

6 祇園城タイプから坏1類・「大宝城Ⅰ類」へ

祇園城タイプは底径がやや大きく、器壁が薄い。ところが、本田遺跡のピット1621から9点一括出土したカワラケ（第15図10～17参照）では、底径が小さくなっており、体部は薄手のままだが、祇園城タイプと坏1類Aタイプの間期的様相を示す。類似例は古河市香取東遺跡第23号溝跡（第2図50）にもみられ、古瀬戸後Ⅱ期とみられる折縁深皿片が伴う。おそらく15世紀前半頃に、祇園城タイプのなかから底径が小さいもの（坏形のもの）が出現するのであろう。

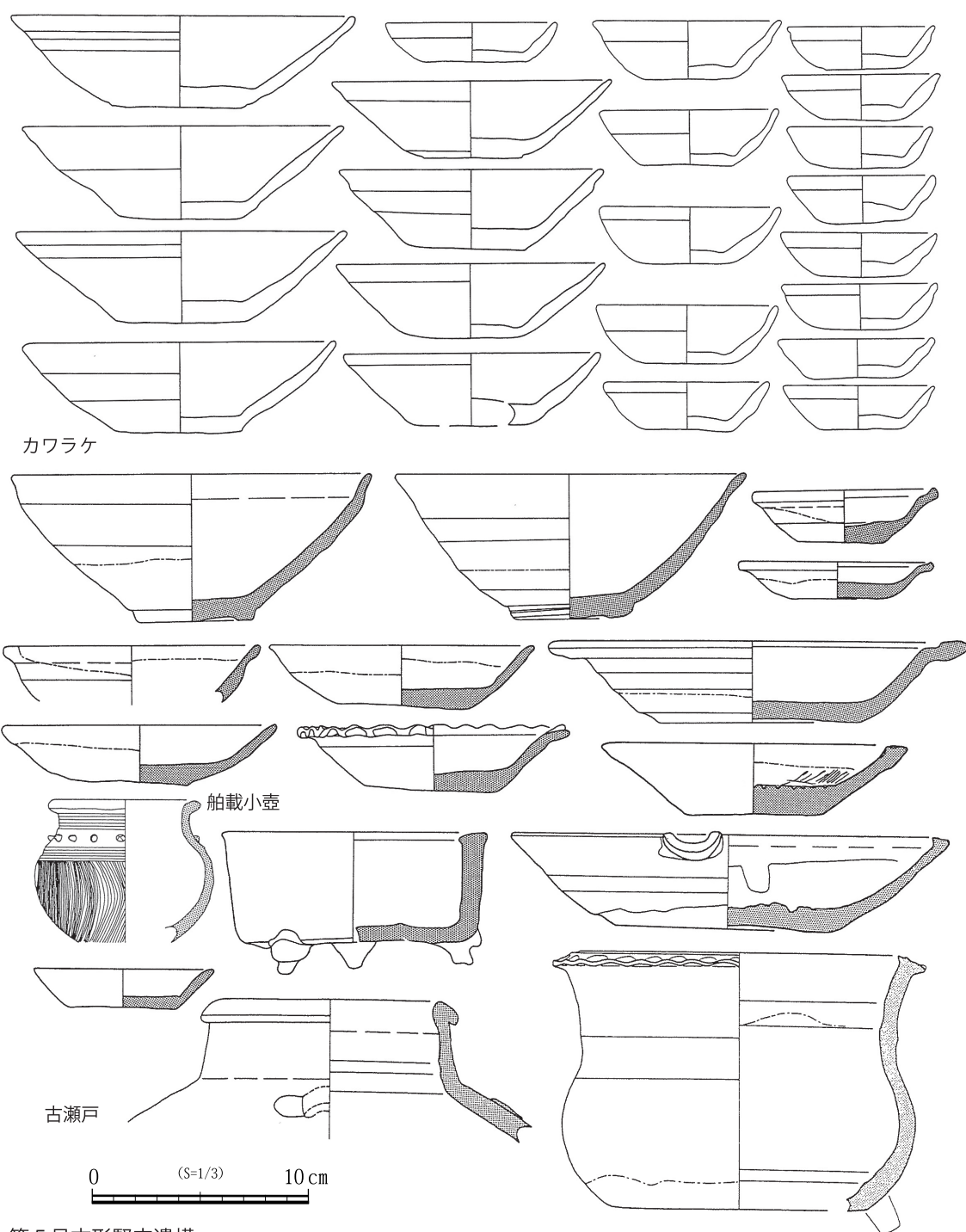
本田遺跡では、坏1類Aタイプ（大宝Ⅰ類）で古手の特徴を備えるものも出土している。本田遺跡第4次調査のSD91（第15図18～21）では、口径13.4cmと大振りの環形カワラケ（19）が出土している。口縁部が緩く外反し、体部下位で厚くなる点から、坏1類Aタイプとみて良いと思う。遺物に古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ古期の天目茶碗、内耳鍋が伴っている。やや器高の低い内耳鍋の年代が問題となるが、天目茶碗の様相から15世紀中



第13図 祇園城跡の遺物（1）

頃以降、15世紀後半のうちに位置付け可能だろう。同じく、口径13.4cmを測る下妻市皆葉遺跡SK43出土資料も同時期とみられる（千代川村

教委2003・第11図参照）（註5）。このように、坏1類Aタイプ（出現期の大宝I類）が祇園城タイプを祖形としていることが想定される。

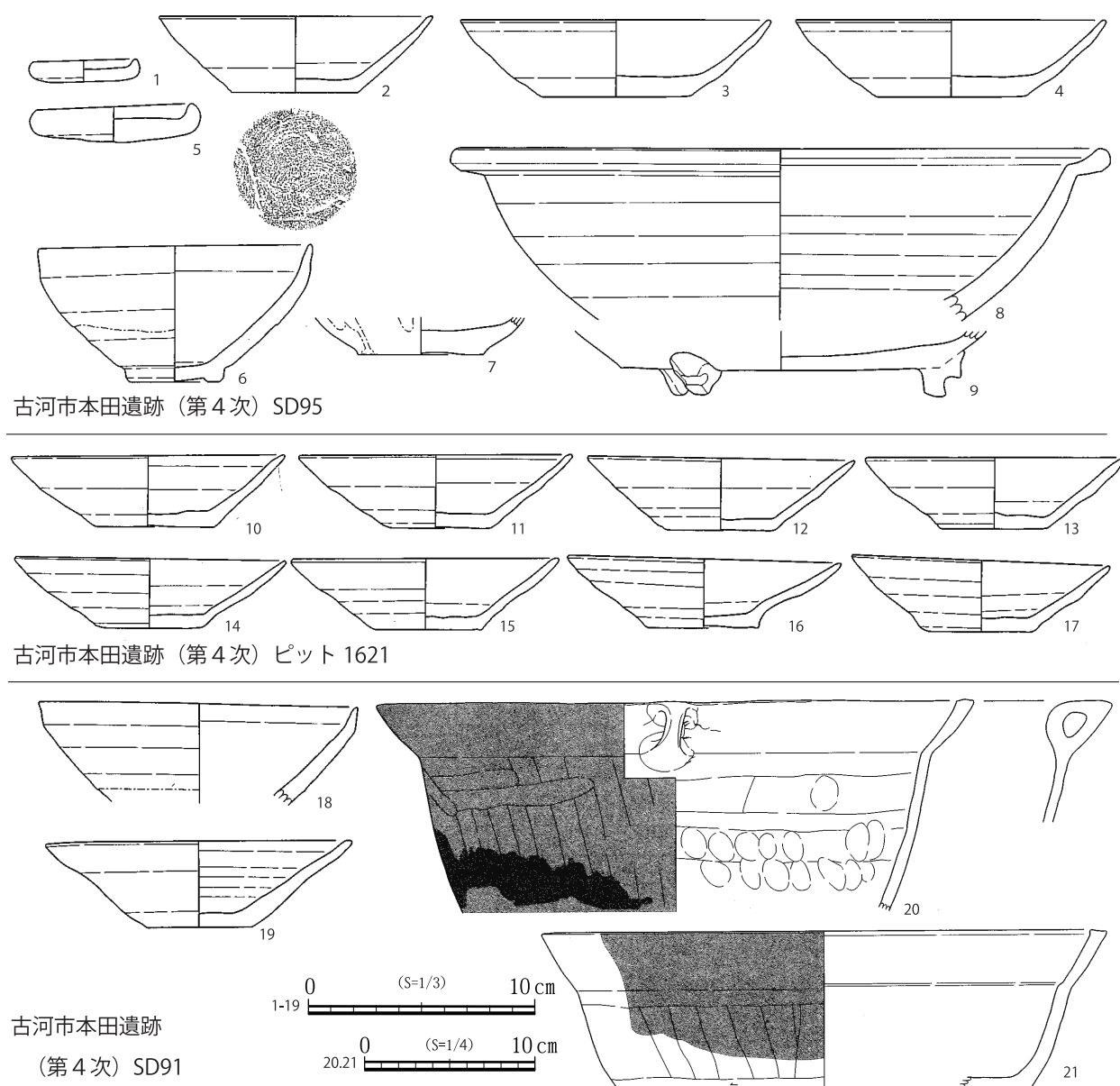


第5号方形竪穴遺構

第14図 祇園城跡の遺物(2)

ここまでの内容から、【祇園城タイプ→坏1類Aタイプ=大宝I類の成立】という系譜が想定された。祇園城タイプから坏1類Aタイプへの変遷は、器壁の厚手化、法量の小型化の傾向を示しているが、坏1類を通してこの変遷傾向は継続する。坏1類Aタイプの変遷は、口径13cm台の古河市

本田遺跡SD91・下妻市皆葉遺跡SK43の例を古期とし、続いて、口径11cm前後で強いロクロナデ痕を有し、底内面を深く窪ます大宝城地下式坑(S K 3702)、本田遺跡第9号溝跡、さいたま市渋江鍔金遺跡第5地点堀1下層出土例が古手の要素を持つものであろう。以後は、さらに器壁の厚



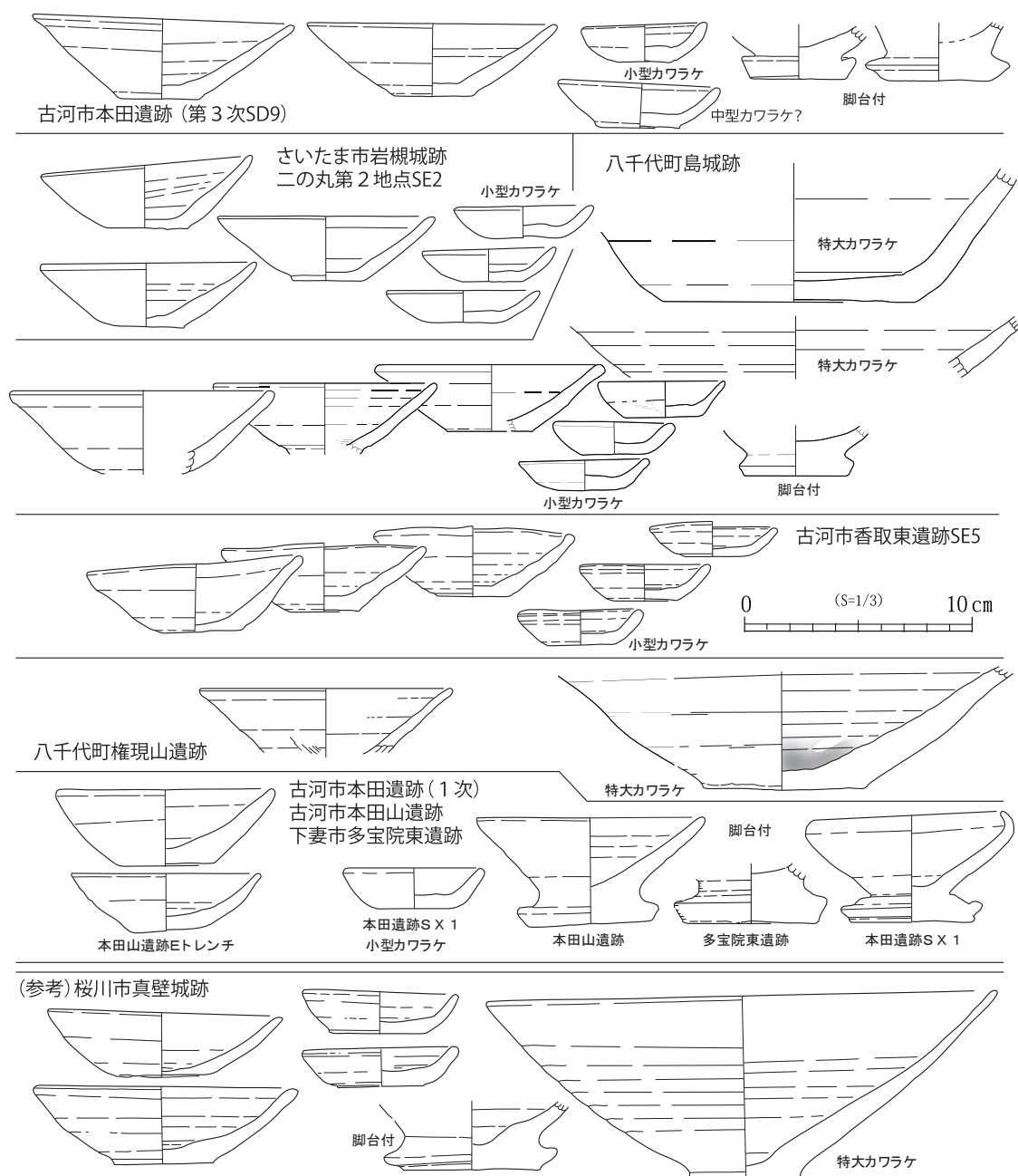
第 15 図 本田遺跡の古式資料

手化と小型化が進行し、坏 1 類 B・C タイプへと移行するのである。

7 「大宝Ⅰ類」の組成

ここでは「大宝Ⅰ類」カワラケの組成について考えておこう。岩槻城跡の報告書では、このタイプのカワラケに大小 2 法量があることが明確に指摘された（さいたま市教委 2008）。第 16 図に示すとおり、口径 10cm 弱のもの 6 点と口径 6cm 内外のもの 12 点である。古河市香取東遺跡 5 号

井戸や東の門西の門遺跡でも同様の組成が確認される。これらは、口径 10cm 内外のもの（大皿）が明確な逆台形状の側面形態を有するのに対して、口径 6cm 内外のもの（小皿）は、体部下位が強く丸まって、側面形態が手づくねのような半球形に見える点で大きく印象が異なる。おまけに、小皿は内底面のナデと押し込みが弱いので、底部が窪まないものが多い。しかし、それらの胎土の特徴や色調はほぼ一致しており、出土状況からも大小のセット関係にあることが明らかである。ち



第 16 図 大宝 I 類カワラケの器種

なみに本田遺跡では中間サイズのものが見られ、初期に中法量のものがあつた可能性がある。

各地から出土する大宝 I 類カワラケの法量は、口径 10cm 内外・口径 6cm 内外の大小 2 法量が多く、基本のセット関係として確立していたものとみられる。ただし、これよりも明らかに大型のものも出土している。八千代町権現山遺跡出土品（第 16 図参照）がそれである（八千代町教委

2011）。権現山遺跡第 3 号地下式坑から出土したカワラケは、底径 7.2cm もあり、そこから体部はほぼ直線的に立ち上がる（第 16 図参照）。胎土の特徴や色調、底内面を強く窪ませる調整が大宝 I 類カワラケと共通することから、口径 20cm を超える特大のカワラケが、この種のカワラケの組成に含まれていたことが分かる。同様の胎土を有する特大カワラケの体部破片が、近接する

八千代町島城跡でも出土している（八千代町教委 1985）。円弧のカーブや器壁の厚みからみて、権現山遺跡出土品とほぼ同大のカワラケであったことが判明する（第2図32）（註6）。このような口径20cm前後の特大カワラケは、桜川市真壁城跡から一定量出土しており、15世紀後半から16世紀代にかけて存在が確認されている（真壁町教委 2005）。

そして、もう一つ、大宝Ⅰ類に認められる器形として特異なのは、脚台付のカワラケである。このカワラケは、底部を著しく肥厚させて中実の高台状にしたものであり、古河市本田山遺跡の井戸から長祿年間（1457-60）の板碑とともに出土している（総和町教委ほか 2002）ほか、古河市本田遺跡や八千代町島城跡、下妻市多宝院東遺跡からも出土している。本田遺跡1号不明遺構出土例は坏部口縁が大きく折り返されるように内湾するものだが、内面に煤の付着が顕著であり、灯火具としての専用器である可能性がある。この器種は、大宝Ⅰ類の分布圏の外でも認められ、桜川市真壁城跡（真壁町教委 1983・真壁町教委 2005）からかなりまとまって出土しているほか、つくば市小泉館跡、つくば市上野古屋敷遺跡等（茨城県教育財団 1995・2007）でも出土例が認められる。常陸南西部に広くこの脚台付カワラケが存在するものであろう。関東地方での出土例はほぼ皆無であるが、古瀬戸ではこのころ鉄釉の仏供が多く生産されており、器形の類似が注意される。

このような、カワラケの大小（口径10cm内外／6cm内外）に加えて、特大カワラケ、脚台付カワラケを組成に加える点は、特に真壁城跡の組成に類似点が多く、両者の相互影響を想起させる。

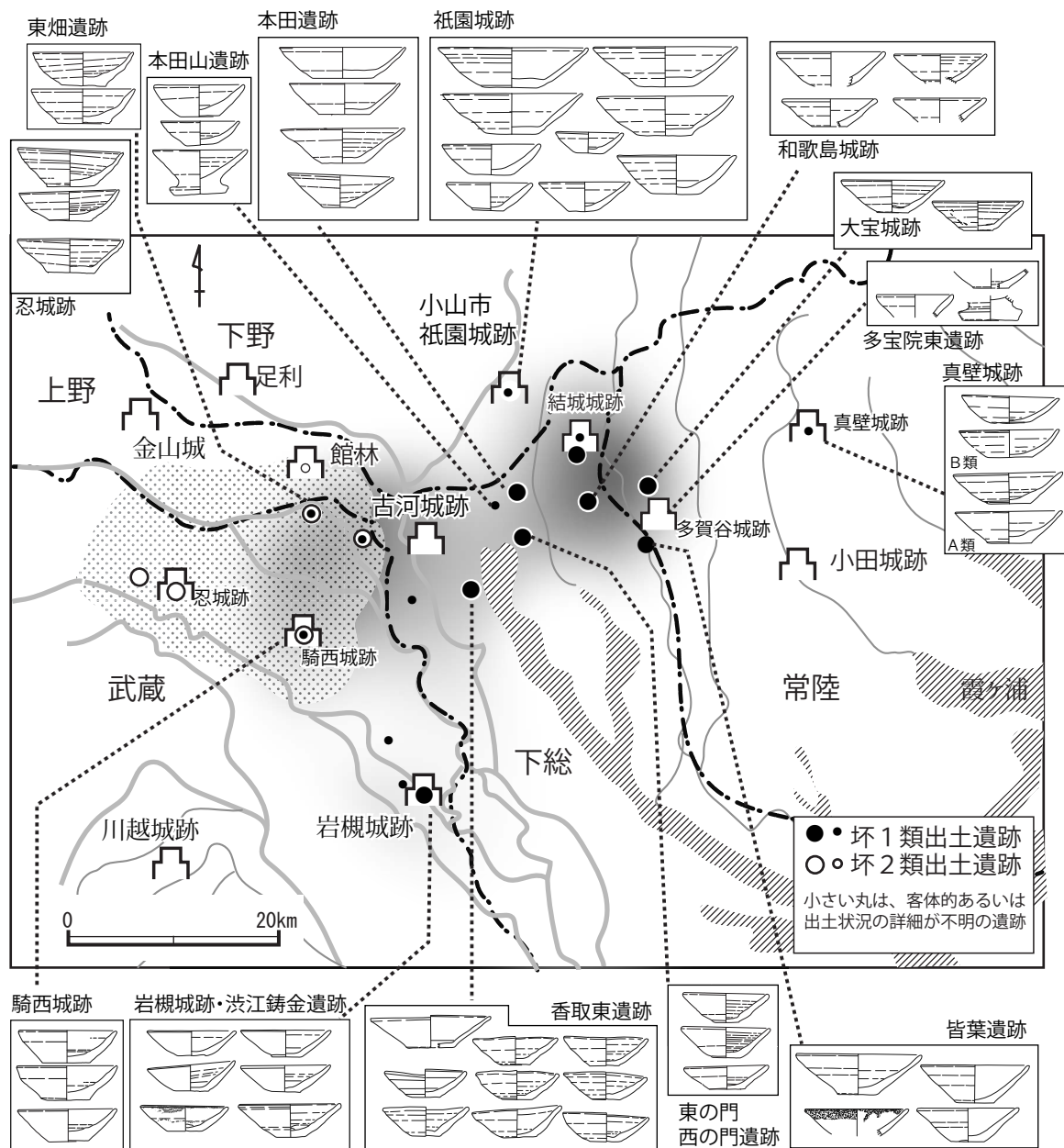
8 坏Ⅰ類（大宝Ⅰ類）の性格

さて、「大宝Ⅰ類」カワラケについて考えておかなければならないのは、その性格である。岩槻城跡出土の資料に関して、田中信は古河公方勢力

との関連性を示唆しており（田中 2005）、その後真壁城跡の資料を図示して「古河公方のR種」を提示した（田中 2007）。また、茨城県考古学協会のシンポジウムで、真壁城跡から客体的に出土した「大宝Ⅰ類」が展示された際「多賀谷系カワラケ」のキャプションが用いられたこともある（註7）。大名権力とカワラケの関連性について論じるだけの力量を筆者は持ち合わせていないので、ここでは、前述のような集成の結果から、若干の検討材料を提示することを意図し、同時にここまでの各節の小結としたい。

まず、成立の問題については、小山市内（祇園城跡）の資料にその直接の祖形が求められるものと考えられる。この点に関しては、田中が、「古河公方のR種」が、「中世前期から東関東を中心に分布する白色胎土の体部が直線的に開き底径に比し器高の高い逆三角形型のカワラケを祖形とする」という指摘の通りである（田中 2007）。その直接的な成立時期は、祇園城跡方形竪穴遺構の事例から古瀬戸後Ⅱ期頃をさほど遡らない時期と思われ、同時期に手づくねカワラケが激減するものとみられる。これは小山氏滅亡後、再興小山氏の段階に相当するだろう（註10）。次に終焉時期であるが、坏Ⅰ種については、東の門西の門遺跡の例から17世紀初頭に降って消費されている。つまり戦国期に留まらず、使用が続いている点が確認される。

分布の問題については、「大宝Ⅰ類」カワラケのうち、坏Ⅰ類は、現在の茨城県古河市、八千代町、下妻市等を中心とする地域において15世紀後半～16世紀前半頃に盛行したものと想定された。分布域の中心は確かに古河公方や多賀谷氏の勢力下であり、その領国内で使用されていたカワラケとしての位置付けは可能と思われる。ただし、16世紀以降の小型化傾向を踏まえると「古河公方系」というにはやや頼りない。多賀谷城・古河城ともに調査例は少なく、城内においてどのよう



坏1・2類分類模式図 (S=1/4)

坏1類Aタイプ 体部下位で厚手	坏1類Bタイプ 体部厚みは平均的	坏1類Cタイプ 厚手・口径10cm未満	坏1類Dタイプ 厚手・体部直線的
坏1類 灰白色系 胎土粗 底径が小さく板目圧痕多い 体部はほぼ直線的に立ち上がる Aタイプで口径11cm以上のものがあるが、B～Dは10cm台以下			
坏2類Aタイプ 体部に丸み、内底面ナデ弱い	坏2類Bタイプ 底部付近に括れ、内底窪み広い	坏2類Cタイプ Bタイプに準じ、底部厚い	坏2類Dタイプ やや薄手、黄橙色系色調
坏2類 坏形で底径は小さいが、1類より大きい 体部の形態に変異あり。口径10cm以上のものが主で、厚手のものが多く、底部付近の括れも目立つ。			

第17図 坏1・2類の分布

なタイプのカワラケが主に使用されたかは不明である。小山市祇園城跡では、16世紀以降も口径12cm代のものを含むカワラケの出土が知られており、カワラケの多法量化がそれなりに想定される（鈴木 2017）。現状確認し得る事例からみるならば、大宝Ⅰ類の器種組成はごく一部の特大カワラケを伴うが、総じて法量分化に乏しく、この点で大名権力と関わって儀礼に特化したとは言い難い。現在、茨城県内でまとまった出土例が確認できる大宝Ⅰ類はいずれも拠点城館からの出土では無いため、この点の検討は城館調査の進展に期待したい。また、岩槻城跡の出土事例が地域的にどのように位置付けられるのかは、大きな問題となろう。今回は古河以西、岩槻城までの地域の事例を十分に収集できなかったため、古河公方奉公衆である幸手一色氏や、関宿野田氏の勢力圏に関しては様相が把握しきれていない（註8）。実際、これらの地域に低地部が多く、考古学的調査例が少ないという事情も絡んでいる。

中世後半期のカワラケの用途は、中世前半期に比べその使用階層が広がったという背景はあるだろうが、やはり多量に使用する機会はある特定の階層に限られていた。その点で他の生活用具とは異なった生産・流通システムの元にあった可能性は充分にあり、戦国期においては、「大名領国」と一定の関係を保って流通していた可能性は否定し得ないと思う。

たとえば、生活用具として普及していたとみられる土鍋との間に、分布の相違があることは注目されて良いであろう。古河市内の遺跡では、市域の西に位置する香取東遺跡、北新田C遺跡で15世紀後半～16世紀前半の瓦質土器鍋が土鍋全体の半数以上出土しているが、市域東側では土師質土器鍋が優勢になり、八千代町域や下妻市域の遺跡ではほぼ全て土師質土器鍋で占められる状態となる（註9）。古河市域は瓦質土器鍋の分布圏としてその南東端部に位置しているが、大宝Ⅰ類カ

ワラケはその両者の分布圏に跨って分布していることになる。ここに、用途に規制された土器分布の特殊性を垣間見ることができる。

坏2類に関しては、埼玉県利根川流域から北西部の低地エリアに広く分布する。ただし、前述のように岩槻城周辺の例などは坏1類であり、埼玉県全体に坏2類が広がるわけでは無いようだ。

坏2類も、祇園城跡など下野方面の影響下に成立した可能性があるが、体部の丸み加わり、底部付近の括れが強くなるなど、坏1類とは異なる展開を辿る。これらについても「古河公方系」として一括されることもあったが、坏1類と異なる変遷を明らかにできた。型式分化の視点からも「古河公方系」を捉え直す必要がある。

さて、坏2類は、騎西城跡（坏2類Dタイプ）・忍城跡（坏2類Bタイプ）など拠点城館での独自の変遷をするようだが、いずれも16世紀後半までには、坏形以外（皿形）のカワラケが主体化する様相で、坏2類の盛行期は短いようである。加えて、騎西城跡や利根川沿いでは、それに混じって坏1類Aタイプが客体的に持ち込まれる点も注意しておきたい。

まとめ

本稿で問題とした「大宝Ⅰ類」のカワラケについて、その出現・変遷・分布・組成について検討した。若干の考察とともにまとめておきたい。

14世紀代の茨城県西部から栃木県南部では、手づくねカワラケがかなり広範に分布していた。15世紀前葉頃になると、小山市祇園城跡の方形竪穴遺構等から薄手・大形の坏形カワラケ（祇園城タイプ）が主体的に出土し、古河市本田遺跡でも認められる。これらを祖形として、15世紀中頃に底径が小さな坏形カワラケが出現したものと思われる。それが、体部下位が厚く、内底面を強く撫でつける坏1類Aタイプである。

既に服部敬史（服部 1996）によって関東東西

の椀形・外反皿形カワラケの対峙構造が論じられている。本稿の検討を踏まえると、椀形優勢地域の成立に、下野国小山が重要な位置を占めることが想定される。伝統的な権威を誇った小山氏は小山義政の乱（1380～82）で滅亡し、結城氏系小山氏が再興する。一方で、小山市内での編年によれば「祇園城タイプ」の祖形は、14世紀前半に遡って系譜が辿れるようであり（鈴木 2000・2017）、継続的に土器変遷が途切れない小山地域の求心性が垣間見られる。その小山と古河地域に共通する手づくね・坏形のカワラケが分布することは、戦国期より前から両地域に活発なヒト・モノの移動があったことを示す。古河公方が東関東の各勢力を背後に、なお西関東を睨む前線として「古河」を選択した背景のひとつであろう。

さて、茨城県西部では、16世紀中頃までに、坏1類A～Cタイプが変遷し、盛期を迎える。16世紀後半の様相に不明な部分が多いが、17世紀初頭の坏1類Dタイプまで確実に受け継がれている。一方、利根川流域では器形の変異が多く、口径の縮小化も明確では無い。同じ坏形カワラケでも、騎西城跡、忍城跡などで異なる形態が使用され、独自の変遷を辿るようである。

つまり、この時期の城館では「坏形」の基本形態は共有しつつも、各々に個別のカワラケが消費され、変遷していたのだろう。調査例の少ない古河城跡の様相が不明であるが、戦国期の城館のカワラケは拠点城館等を中心とした別個の生産体制をもっていた可能性がある。秋本がC類（本稿の坏2類）について、各遺跡で胎土が異なり「基本的には、在地製」としたこともこれを裏付ける（秋本 2008）。それでも地域を超えて「坏形」の形態とその製作手法を共有している点は重視しておきたい。そこにはある種の「様式」が設定できるように思われ、広義の「大宝Ⅰ類」は坏形カワラケの【様式】に、狭義の「大宝Ⅰ類」を含む坏1・坏2以下の細分は、その中の【型式】に相当する

と理解したい。その【器種組成】としては、特大のカワラケや脚台付のものが比較的多く認められる点が特徴的であるが、これは主として坏1類に認められ、坏1・2類が別型式であるという考えを補強する。様式としての大宝Ⅰ類は、大枠で古河公方関連の地域と一致するが、内実は異なる類型の集合である。この点の分析を進めて実態を把握し、その背景を考えることが重要だろう。

一方、法量的には、初期のものに3法量ほどが認められるようだが、大小2法量（大皿9～11cm内外、小皿6cm程度）が基本的枠組みであった。小皿類は今回細かく検討し得なかったが、大小2法量は坏1・2の両地域で見られる様相のようだ。ただし、坏2のエリアでは若干小皿の出土量が少ない気がする。あるいは、前述の器種組成と連動する問題かもしれない。

いずれにしても「大宝Ⅰ類」の様式に、それ以上の顕著な法量分化は確認できず、儀礼の器のような評価は難しい。一度、権力の問題から離れて、カワラケの分布の意味することを考える必要があるだろう。

以上、東関東の坏形カワラケの位置付けを検討したが、不十分な分析で、多々課題を残した。今後も遺物論としての分析を進めながら、戦国社会の中での「カワラケ」の位置付けを考えてみたい。

謝辞

2000年代から坏形カワラケが気になり、本稿も2010年頃の未発表稿を修正して構成した。その後、埼玉県の手のカワラケを見るうち、サイズや形態に違和感を持ち始めた。熊谷・忍城の資料を実見してその感は強まり、騎西城資料の熟覧を機に稿を再構成することにした。この間、多くの方々のお世話になった。今後も地道に検討を行っていきたい。

遺物の実見・構成にあたって、多くの方々からご協力・ご助言を頂きました。また、各遺跡の調査・

整理作業時に多くの担当者から有益なご教示を頂きました。末筆ながらお礼申し上げます。(敬称略)

青木文彦・赤井博之・宇留野主税・遠藤知成・
及川謙作・狩谷崇文・蔵持俊輔・根田洋平・齊藤
達也・坂下貴則・砂生智江・澤口和正・嶋村英之・

註

- 1 16世紀末葉以前を大宝Ⅰ類、近世を大宝Ⅱ類に大別したものである(村山卓 2008)。
- 2 鈴木裕子「江戸出土の非在地産の葉茶壺形土器」／村山卓「茨城県から出土した葉茶壺形土器をめぐって」いずれも江戸在地土器研究会 2009『江戸在地土器の研究Ⅶ』所収。
- 3 「常陽下妻香取宮内円福寺記録」(内閣文庫本)。古河市史編さん委員会『古河市史』資料 中世編 1981
- 4 『長福城跡』1995 栃木県埋蔵文化財調査報告第 158 集。長福城跡の資料については、大澤伸啓が下限を 14 世紀後半頃と捉えている(大澤 2003「下野国におけるかわらけの変遷」『塙静夫先生古稀記念論文集 栃木県の考古学』)。
- 5 既に宇留野がこの資料を茨城県西坏 A の初期資料と位置付けている。(宇留野・新垣 2011)
- 6 八千代町教育委員会、山野井哲夫氏のご厚意で実測させていただいた。記して感謝いたします。
- 7 茨城県考古学協会シンポジウム「茨城中世考古学の最前線」(2011.1.29～30) 会場内遺物展示にて。
- 8 なお、青木文彦氏のご教示によれば、岩槻以外の旧太田庄内でも「大宝Ⅰ類」に類似する形態のカワラケが出土しているという。岩槻城と茨城県西部の

新垣清貴・鈴木一男・高橋杜人・滝澤誠・宅間清公・田中信・広瀬季一郎・福田 聖・水口由紀子・元林恵子・山野井哲夫・渡邊理伊知

いつも見学会でお世話になっている江戸在地土器研究会・江戸遺跡を考える会・中世を歩く会の皆様にもこの場を借りてお礼申し上げます。

間に、大宝Ⅰ類カワラケが連続的に分布している可能性もあろう。

- 9 香取東遺跡では少なくとも半数以上の土鍋が瓦質であり、秋本分類(秋本 2006) D 群が主体である。古河市北新田 A 遺跡の井戸出土例では、全て瓦質の鍋で、秋本分類の C 群で占められており、15 世紀後半に瓦質鍋が普及していたことが知られる(狩谷・成田・村山 2012)。より東側の本田遺跡や北山田北久保遺跡でも瓦質鍋が出土しており、その意味において現在の古河市域は北武蔵・上野と同じく瓦質鍋流通圏であった。古河公方移座前後の時期における、古河の立地条件としてあらためて指摘しておきたい。
- 10 手づくねカワラケの消滅について、大澤は小山義政・若犬丸の乱を契機とする小田氏との関係の変化に着目している。また、ロクロカワラケ(本稿で言う「祇園城タイプ」を含む)が足利市域の例と類似するようになる点に、鎌倉公方との関連を示唆した(「下野国におけるかわらけの変遷」前掲)。確かに小山地域における手づくねカワラケからロクロカワラケへの変遷は、小山氏の断絶、結城氏による再興と前後しており、その関連性が疑われよう。

引用・参考文献

- 青木文彦 2005 「岩槻(岩付)城跡」『戦国の城』高志書院
- 赤井博之 2021 「Ⅷ 資料紹介」『下妻市ふるさと博物館年報』第 16 号
- 秋本太郎 2005 「上野と周辺の関係ー在地土器の分布論から探るー」『海なき国々のモノとヒトの動き』内陸遺跡研究会
- 秋本太郎 2008 「戦国期北関東のかわらけ」『中世東国の世界 3(戦国大名北条氏)』高志書院
- 浅野晴樹 1991 「東国における中世在地系土器について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 31 集
- 荒川善夫 2007 「下野宇都宮城跡出土のかわらけと武士の館再考」『栃木県立博物館研究紀要ー人文ー』第 24

- 茨城県教育財団 1995 『小泉館跡』茨城県教育財団文化財調査報告書第 97 集
- 茨城県教育財団 2007 『上野古屋敷遺跡 1』茨城県教育財団文化財調査報告書第 285 集
- 岩槻市教育委員会 2001 「渋江鑄金遺跡第 5 地点」『平成 12 年度岩槻市内遺跡調査報告書』
- 宇留野主税 2005 「真壁城跡本丸出土資料の再検討」『アーキオ・クレイオ』第 6 号 東京学芸大学考古学研究室
- 宇留野主税・新垣清貴 2011 「茨城県西・鹿行地区における中世後期のかわけ編年」『茨城中世考古学の最前線』
- 永越信吾 2012 「下総と江戸東郊のカワラケ」『江戸在地系カワラケの成立』（江戸遺跡研究会第 25 回大会資料）
- 小山市教育委員会 2002 『祇園城跡 I』（小山市文化財報告書第 55 集）
- 加須市教育委員会 2019 『騎西城武家屋敷跡第 42・48 次調査 - 中近世編 - 『騎西城跡』遺物概観（漆器・かわらけ）』
- （株）玉川文化財研究所・総和町教育委員会 2002 『県営担い手養成畑地帯総合整備事業（上大野地区）埋蔵文化財発掘調査（第 1 号）報告書 本田山遺跡』
- （株）玉川文化財研究所・総和町教育委員会 2002 『県営担い手養成畑地帯総合整備事業（上大野地区）埋蔵文化財発掘調査（2 級町道地区）報告書 本田山遺跡』
- （株）株式会社武蔵文化財研究所ほか 2010 『茨城県結城市 須久保塚古墳』
- 狩谷崇文・成田健太郎・村山卓 2012 「個人住宅建設に伴う柳橋地区内埋蔵文化財調査報告書 北新田 A 遺跡」『泉石』第 10 号 古河歴史博物館
- 川村満博 2011 「茨城県内出土の非ロクロ成形かわらけについて」『茨城中世考古学の最前線』茨城県考古学協会
- 川村満博 2018 「茨城県の最終期非ロクロ成形かわらけから見えること」『茨城県考古学協会誌』第 30 号
- 行田市郷土博物館 1989 『行田市郷土博物館研究報告 vol. 1 - 忍城跡の発掘調査 -』
- 熊谷市教育委員会 2020 『諏訪木遺跡Ⅳ』熊谷市教育委員会
- 古河市教育委員会 2010 『本田遺跡』古河市文化財調査報告書第 3 集
- 古河市教育委員会・東京航業研究所 2015 『本田遺跡（第 3 次）』
- 古河市教育委員会・東京航業研究所 2016 『本田遺跡（第 4 次）』
- 古河市教育委員会・東京航業研究所 2022 『東の門西の門遺跡』
- 古河市史編さん委員会 『古河市史』資料 中世編 前掲
- 腰塚博隆 2020 「V 調査のまとめ」『諏訪木遺跡Ⅳ』熊谷市教育委員会
- 今平利幸 2017 「下野宇都宮氏の城館と城下町」『北関東研究集会 伝統的武家の城下町』資料集 城下町科研・北関東研究集会事務局
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2018 『東畑遺跡』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2019 『利根川旧堤防跡』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2022 『宮西Ⅱ／宮東Ⅱ』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2024 『栗橋宿西本陣跡Ⅱ』
- 埼玉県立歴史資料館 2005 『埼玉の戦国時代 城』（企画展図録）
- さいたま市教育委員会 2008 『岩槻城跡（三の丸第 7 地点）発掘調査 保存処理・自然科学分析報告 埋蔵文化財確認調査』文化財調査報告書第 3 集
- 下妻市教育委員会 2008 『国指定史跡大宝城跡発掘調査報告書（第 37 次調査）』下妻市教育委員会
- 下妻市教育委員会 2012 『下妻市内遺跡 2』
- 新垣清貴 2020 「江戸氏の野望―常陸戦国に名を遺した武家の歴史―」（水戸市埋蔵文化財センター令和 2 年度企画展展示解説シート）
- 鈴木一男 2000 「調査の成果」『外城遺跡Ⅲ』（小山市文化財報告書第 68 集）
- 鈴木一男 2017 「小山市出土のかわけについて」『北関東研究集会 伝統的武家の城下町』資料集 城下町科研・北関東研究集会事務局
- 総和町教育委員会 2001 『香取東遺跡・釈迦才伝遺跡』

館林市史編さん室 2010 『館林城と中近世の遺跡』（館林市史特別編第4巻）

田口睦子 2011 「県央・県北のかわれけ」『茨城中世考古学の最前線』茨城県考古学協会

田中信 2005 「山内上杉氏の土器（かわらけ）」とは『戦国の城』高志書院

田中信 2007 「土器からみる関東の戦国時代と河越」『後北条氏と河越城』川越市立博物館第30回企画展示図録

田中信 2012 「北武蔵のカワラケ」『江戸在地系カワラケの成立』（江戸遺跡研究会第25回大会資料）

中世を歩く会 2002 『在地土器検討会－北武蔵のかわれけ－記録集』

千代川村教育委員会 2003 『皆葉遺跡発掘調査報告書』（千代川村埋蔵文化財発掘調査報告書第9集）

服部敬史 1996 「東国における15・16世紀の土師器皿様相」『八王子の歴史と文化』第9号 八王子市郷土資料館

比毛君男 2009 「土浦市域の中世土器様相」『土浦市立博物館紀要』第19号

広瀬季一郎 2011 「県南のかわれけ」『茨城中世考古学の最前線』茨城県考古学協会

真壁町教育委員会 1983 『真壁城跡』

真壁町教育委員会 2005 『史跡真壁城跡Ⅱ』

馬淵和雄 2002 「第四章 まとめと考察」『杉本寺周辺遺跡』鎌倉市教育委員会

水口由紀子 2016 「武蔵・下野の土器」『中世武士とかわれけ』高志書院

村山卓 2008 「遺物からみた大宝城の様相」『国指定史跡大宝城跡発掘調査報告書（第37次調査）』下妻市教育委員会

村山卓 2010 「北山田北久保遺跡出土の手づくねかわらけ～年代的・空間的位置付けを中心として～」『北山田北久保遺跡』古河市埋蔵文化財調査報告書第4集

村山卓 2013 「大宝城跡出土の手づくねかわらけ」『国指定史跡大宝城跡発掘調査報告書（第40次調査）』下妻市教育委員会

八千代町教育委員会 1985 『和歌（島）城跡確認調査報告書』

八千代町教育委員会 2011 『権現山遺跡』

図版出典 第2図：1～8 下妻市教委 2008・9～32 八千代町教委 1985 再トレース、一部は再実測・33～50 総和町教委 2001 再トレース 第3図：古河市教委・東京航業研究所 2015 引用 第4図：古河市教委・東京航業研究所 2022 引用 第5図：1 埤埤文 2024、2～5 岩槻市教委 2001 引用 第6図：さいたま市教委 2008 引用 第7図：埤埤文 2018・2019・2022 引用 第8図：埤埤文 2018 引用 第9図：加須市教委 2019 引用 第10図：1～21 行田市郷土博物館 1989、22～27 熊谷市教委 2020 引用 第11図：各報告書から再トレースして構成 第12図：（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1995 『長福城跡』引用 第13・14図：小山市教育委員会 2002 引用 第15図：古河市教委・東京航業研究所 2016 から引用 第16・17図：各報告書から再トレースして構成